

厚沢部町教育委員会発掘調査報告書 第10集

史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡

# 館 城 跡 VIII

－平成23年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書－

平成24年3月

北海道厚沢部町教育委員会



## 序 文

北海道南西部に位置する厚沢部町は、人口5千人に満たない小さな町ではありますが、川と森に囲まれた自然豊かな町であります。まちの8割以上を森林が占め、ヒノキアスナロやゴヨウマツの北限であり、トドマツの南限でもあります。多様な樹種で構成される森林は、多様な野生生物を育み、厚沢部町独特の豊かな自然景観を創りあげました。私たちの先人も、厚沢部の豊かな森とともに暮らし、その伝統や文化を築き上げてきました。このたび発掘調査を実施いたしました館城跡も、そのような町の貴重な文化財の一つであります。

館城跡は、明治元年、松前藩によって蝦夷地経営の新たな拠点として築かれましたが、築城開始からわずか2ヶ月半という短期間で、旧幕府軍の攻撃を受け落城し、その後、再建されることなく現在に至っております。今では、わずかに土塁や堀、礎石、井戸跡が、当時の面影をとどめるのみとなっています。

現在の館城跡は、「館城跡公園」として町民に親しまれており、毎年5月上旬には「館城跡まつり」が開催され、多くの町民が心待ちにする恒例の行事となっています。また、幕末から維新期にかけての北海道の大きな変革期を象徴する遺跡として、学術的にも高く評価されており、観光客や歴史学習のツアーなどに利用され、注目を高めています。

昭和41年に北海道の指定史跡となり、さらに平成14年に国の史跡に指定されました。平成17年から史跡の概要を把握するために発掘調査を継続して実施しており、また、平成18年度には保存管理計画を策定し、史跡の保存管理に努めているところであります。今後は、館城跡のより積極的な公開・活用を図っていくために、本格的な保存整備事業を実施する予定です。

今年度の発掘調査では、館城跡北西部の堀・柵列の所在を確認するために、史跡外を含めた範囲内容確認調査を行いました。史跡外西側の町道上館城ノ岱線敷地内の調査により堀・柵列を検出し、西側の外郭線の解明に大きな進展がありました。これらの成果が館城跡の保存整備に活用されるのみならず、調査研究における基礎資料となることを期待いたします。

最後になりますが、本事業の実施に際しまして、文化庁、北海道教育委員会をはじめとする諸機関・各氏から、多くのご指導・ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

平成24年3月

厚沢部町教育委員会  
教育長 中 井 文 夫



## 例言

1. 本書は、厚沢部町が国庫補助（埋蔵文化財緊急調査費）を受けて、平成23年度に実施した「町内遺跡発掘調査等」事業における埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺跡の地番は北海道檜山郡厚沢部町字城丘158ほかである。
3. 本書の編集は石井淳平（厚沢部町教育委員会事務局社会教育係主事・学芸員）が担当した。
4. 文責者は、特に記した者以外は石井淳平である。
5. 現場及び遺物の写真撮影は石井淳平が担当した。
6. 陶磁器の鑑定は、石井淳平が行った。
7. 陶磁器の実測・トレースは佐々木真弓（整理作業員）と石井淳平が行った。
8. 遺構図面等のトレースは佐々木真弓と石井淳平が行った。
9. 花粉分析及び火山灰同定はパレオ・ラボ株式会社に委託した。
10. 出土資料は厚沢部町教育委員会が保管する。
11. 調査にあたっては、「館城跡調査検討委員会」を組織し、指導を受けながら調査を実施した。

委員長	藤沼 邦彦（元弘前大学人文学部教授）
副委員長	後藤 元一（後藤環境デザイン研究室）
委員	久保 泰（松前町郷土資料館館長） 佐藤 永吉（館観光促進会会長） 千田 嘉博（奈良大学文学部教授）
指導・助言	近江 俊秀（文化庁文化財部記念物課） 西脇対名夫（北海道教育庁文化・スポーツ課文化財調査グループ） 田中 哲郎（北海道教育庁文化・スポーツ課文化財調査グループ）
12. 調査にあたっては、下記の方々及び機関のご協力、ご助言をいただいた。

伊勢谷達志、伊勢谷広、右代啓祝・鈴木琢也（北海道開拓記念館）、宇部則保（八戸市教育委員会）、大森忠行、木村秀喜、斎藤信敏、佐藤剛・土肥研晶（北海道埋蔵文化財センター）、只野みさほ、只野久美子、吉田藍、山岸登、由利和男

## 記号等の説明

1. 実測図等の縮尺は原則として以下の通りとし、全てスケールを付して図中に標示する。

遺構図	40分の1	陶磁器・金属製品	3分の1
-----	-------	----------	------
2. 実測図中の方位は真北（日本測地系平面直角座標系11系のX軸の正方向）を示す。
3. 土層等の色調、含有物の混在状況（面積比率）については、『新版 標準土色帖』（1996年版）に基づき表記した。



# 目次 (本文・目次・表・図版)

序文  
例言  
記号等の説明

<本文目次>	
I 章 調査の概要	1
1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査にいたる経緯	1
4. 調査結果の概要	2
5. 調査の経過	3
(1) 調査準備等	3
(2) 現地調査	3
(3) 整理作業等	4
II 章 遺跡の位置と環境	5
1. 地理的環境	5
(1) 位置と地形	5
(2) 地質	5
(3) 館城跡関連遺跡	5
2. 館城築城とその経緯	6
(1) 13代藩主崇広の死去と徳広の藩主就任	6
(2) 正義隊のクーデタ	6
(3) 館城の築城	6
3. 館城跡の外郭線と遺構配置	7
III 章 調査の方法	13
1. 発掘調査基線	13
2. 調査の方法	13
(1) 掘削	13
(2) 現地測量	14
(3) 写真記録	14
(4) 1次整理	14
(5) 2次整理	14
(6) 保管	14
3. 基本層序	14
IV 章 遺構と出土遺物	17
1. 調査結果の概要	17
2. 第1調査区	18
(1) 調査の概要	18
(2) 調査の手順	18
(3) 1-1調査区	18
(4) 1-2調査区	19
(5) 1-3調査区	19
3. 第2調査区	20
(1) 調査の概要	20
(2) 調査の手順	20
(3) 2-1調査区概要と土層	20
(4) 2-1調査区堀分岐部分	21
(5) 2-1調査区堀・柵列拡大	21
(6) 2-2調査区	22
(7) 2-3調査区	22
4. 調査区出土遺物	22
V 章 自然科学的分析	49
1. 館城跡から検出されたテフラ層	49
(1) はじめに	49
(2) 試料と方法	49
(3) 結果	49
(4) 考察	50
2. 館城跡の花粉分析	53
(1) はじめに	53
(2) 試料と分析方法	53
(3) 分析結果	53
(4) 考察	53

VI章 調査のまとめ	58
1. 館城北側の状況—第1調査区の成果	57
(1) 遺構・遺物の検出状況から考える流跡北側の区域の性格	57
(2) 1-1調査区沢状地形の埋没過程について	
	57
2. 史跡外西側の堀・柵列—第2調査区の成果	
	58
3. 自然科学的分析の結果について	58
(1) 火山灰同定	58
(2) 花粉分析	59
4. 館城跡外郭線調査にかかる今後の課題	59
参考文献	61

#### <挿図目次>

II章	
図1 厚沢部町の位置と館城跡関連遺跡	8
図2 館城跡の位置と周辺の地形	9
図3 指定地周辺の地形と指定範囲	10
図4 館城跡遺構配置図	11
III章	
図5 グリッドの呼称方法	13
図6 基本層序模式図	15
IV章	
図7 平成23年度館城跡発掘調査区配置図	24
図8 第1調査区全体図	25
図9 1-1調査区平面図	26
図10 1-1調査区沢状地形	27
図11 1-1調査区西壁・沢状地形断面	28
図12 1-2調査区平面図	29
図13 1-2調査区東壁断面	30
図14 1-3調査区平面図	31
図15 1-3調査区西壁断面	32
図16 1-3調査区中央トレンチ断面	33
図17 第2調査区全体平面図	34
図18 2-1調査区平面図	35
図19 2-1調査区堀分岐部分拡大	36
図20 2-1調査区堀・柵列拡大	37
図21 2-1調査区北壁及び西壁断面	38
図22 2-2調査区東壁・堀・柵断面	39
図23 2-2調査区平面図(1)	40
図24 2-2調査区平面図(2)	41
図25 2-2調査区北壁断面	42
図26 2-3調査区平面図	43
図27 調査区出土遺物(1)	44
図28 調査区出土遺物(2)	45
VI章	
図29 1-1調査区沢状地形埋没過程	58
図30 館城跡南東部の堀・土壘・流路	60

#### <表目次>

表1 館城跡発掘調査の経過	2
表2 平成23年度館城跡発掘調査基準杭と座標	
	13
表3 平成23年度調査の概要	17
表4 掲載遺物一覧(陶磁器・ガラス製品)	46
表5 平成23年度出土遺物集計表	47

#### <写真図版目次>

写真図版1	
写真1 1-1調査区全景(北から)	65
写真図版2	
写真2 1-1調査区沢状地形検出状況(東から)	
	66
写真3 1-1調査区沢状地形断面(南東から)	66
写真図版3	
写真4 1-1調査区西壁断面(南東から)	67
写真図版4	
写真5 1-2調査区全景(北から)	67
写真図版5	
写真6 1-3調査区全景(東から)	68
写真7 1-3調査区中央トレンチ断面(北東か	

ら) .....	68	写真17 2-1調査区F-F' 断面（北から） .....	72
写真図版 5		写真図版 9	
写真8 1-3調査区西壁トレンチ（北東から） .....	69	写真18 2-1調査区G-G' 断面（西から） .....	73
写真9 2-1調査区堀検出状況（東から） .....	69	写真19 2-1著アス抱くH-H' 断面（東から） .....	73
写真図版 6		写真図版10	
写真10 2-1調査区全景（南から） .....	70	写真20 2-2調査区全景（南から） .....	74
写真図版 7		写真図版11	
写真11 2-1調査区B-B' 断面（東から） .....	71	写真21 2-2調査区柵列検出状況（南から） .....	75
写真12 2-1調査区C-C' 断面（西から） .....	71	写真図版12	
写真13 2-1調査区C-C' 堀断面（西から） .....	71	写真22 2-3調査区堀検出状況（南から） .....	76
写真14 2-1調査区C-C' 柵列断面（西から） .....	71	写真図版13	
写真15 2-1調査区堀柵列検出状況（西から） .....	71	写真23 調査区出土遺物（1） .....	77
写真図版 8		写真図版14	
写真16 2-1調査区E-E' 断面（東から） .....	72	写真24 調査区出土遺物（2） .....	78
		写真25 堀出土遺物（1） .....	78
		写真26 堀出土遺物（2） .....	78



# I章 調査の概要

## 1. 調査要項

事業名：町内遺跡発掘調査事業

調査主体：厚沢部町教育委員会

調査地：北海道檜山郡厚沢部町字城丘170-1、176-1、177-1、179-1地先、182-2地先

調査面積：1,348m<sup>2</sup>

調査期間：現地調査：平成23年8月18日～平成23年11月30日

整理作業：平成23年12月 1日～平成24年3月31日

## 2. 調査体制

厚沢部町教育委員会事務局

教育長 中井文夫

事務局長 尾山君兆

次長 笠森浩明

社会教育係長 森理生

社会教育係主査 石井淳平（発掘担当者）

社会教育係 船瀬洋太

社会教育係 笠原健（9月30日まで）

社会教育係 西里達郎（10月1日から）

発掘調査作業員

大川順子、佐々木真弓、沢野みどり、武田睦子、長尾数利、山岸富三郎、和田利憲

## 3. 調査にいたる経緯

館城跡は、昭和41年7月7日付北海道教育委員会広報第2945号の告示（北海道教育委員会告示第65号）により、道指定史跡となった。

昭和63年頃から、町では国の史跡指定に向けての取り組みを進め、昭和63年9月29日～10月13日、平成元年10月2日～11月4日、平成2年10月2日～16日の3カ年にかけて、遺構確認調査を行った。この3カ年の調査では、館城跡東部の構や柵の所在が明らかとなった。これらの成果を受け、平成13年6月25日、史跡松前氏城跡福山城跡の追加指定の申請をし、平成14年9月20日付官報号外第208号で、「史跡松前氏城跡福山城跡館城跡」として国指定の告示（文部科学省告示第183号）がなされた。

平成15年7月に担当職員を配置し、平成17年から2カ年で保存管理計画を策定した。また、平成17年度から、保存管理計画策定に必要な堀・土塁など館城跡の外郭線を構成する遺構及び、「散兵壕跡」の内容確認調査を実施した（厚沢部町教育委員会2007）。平成18年度～22年度にかけて、館城跡西側及び北側の外郭線の検出を目的とした発掘調査を実施している。

館城跡北側については、北東部において外郭線が確認されており、平成22年度にこの延長を確認するための調査を実施したが、堀・柵列は検出できなかった。調査の結果、館城跡北辺は自然の沢状地形が東西方向にのびていることが判明し、この沢状地形が館城跡外郭線を形成する可能性も検討された。平成23年度は、平成22年度調査区から沢状地形を挟んだ北側の地域の遺構確認を行うこととした。

館城跡西側については、平成22年度の調査において町道上館城ノ岱線道路敷地の掘削を行い、町道敷地内で堀が屈曲し、北へのびることが確認されている。このことから、平成22年度に設定した3箇所の調査区間を掘削し、堀・柵列の検出を行った。

#### 4. 調査結果の概要

表1 館城跡発掘調査の経過

年 度	調査地区	面積 (m <sup>2</sup> )	調査の目的	調査結果
昭和63～平成2年	南辺土壠地区	2,400	南辺土壠構造確認	
	東辺地区		東辺の堀・柵列の所在確認	堀・柵列の所在を確認
	西辺地区南部		西辺の堀・柵列の所在確認	堀・柵列の所在及びそれらが、さらに北方に延びることを確認
	郭内地区		郭内の建物の所在確認	柱穴列、建物跡を確認
平成17年度	南辺土壠地区	386	南辺土壠構造確認	
	「散兵塹跡」地区		「散兵塹跡」の構造確認	風倒木痕であることを確認
	北辺地区		北辺の堀・柵列の所在確認	所在を確認できず
平成18年度	西辺地区	1,798	西辺の堀・柵列の所在確認	調査区西側へ延びることを確認
平成19年度	南西部地区	397	南辺の堀西側の範囲を確認	当該地区的堀及び柵列の所在が明らかになるとともに、近代の水路等の擾乱との関係が問題となった
平成20年度	南西部地区 (第1調査区)	113	南辺の堀・土壠・柵列の構造及び残存状況確認	堀と近代の水路が別の時期に構築されたことが明らかとなった 柵列の柱痕が良好に検出
	北東部地区 (第2調査区)	1,329	北辺の堀・柵列の所在確認	館城跡北東部の堀及び柵列の所在を確認 「伝米倉跡」周辺の整地層を確認
平成21年度	史跡外西側地区 (第1調査区)	1,090	平成18年度に検出した堀・柵列の延長の確認するため、史跡外西側に調査区を設定	町道東側までは堀が所在することを確認したが、町道西側では堀・柵列を確認できなかった。町道道路敷地盛土下で道路拡幅以前の用水路を検出した。 堀を踏襲・再利用した可能性もある。
	北辺地区 (第2調査区)	788	北辺の堀・柵列の所在確認を目的として町道東側と「伝米倉跡」北西の二カ所に調査区を設定	いずれの調査区でも堀・柵列は確認できなかったが、自然の流路が検出され、これが館城北辺の区画として機能した可能性が高まった。
	北東部地区 (第3調査区)	292	「伝米倉跡」西側の整地層及び区画施設の所在確認	平成20年度調査で検出した柵列の延長上で「溝状遺構」を検出した。柱痕を確認することはできなかったが、区画施設の可能性が高い。
	南西部地区 (第4調査区)	147	南西部の屈曲部分における堀・土壠・柵列の位置関係の確認	堀・土壠・柵列が良好に残存することを確認した。柵列は堀・土壠と並行して屈曲する。

	郭内地区 (第5調査区)	4,550	礎石の残存状況及び建物配置の確認	247基の礎石を検出した。『増田家文書』に記載のある『館城平面図』の建物に類似する5.5間×27間の配列が確認された。「奥御殿」に相当する建物である可能性が想定される。また、「伝米倉跡」南側では5間×13間の礎石配列を確認した。
平成22年度	北辺地区 (第1調査区)	1,138	北辺の堀・柵列の検出を目的として、平成21年度第3調査区西側に調査区を設定	堀・柵列を検出できなかった。 沢状地形を検出
	町道地区 (第2調査区)	260	西側の堀・柵列の検出を目的として、平成18年度調査区に隣接する町道上館城ノ岱線道路敷地内に調査区を設定	堀・柵列を検出した。 堀は約90°屈曲し、北へ延びる。

## 5. 調査の経過

### (1) 調査準備等

- 2月10日 平成23年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出  
 4月1日 22府財第1188号により国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定  
 6月6日 史跡名勝天然記念物現状変更許可申請書提出  
 7月15日 23受府財第4号の447号により現状変更許可  
 8月26日 1-3調査区掘削にかかる史跡名勝天然記念物現状変更許可申請書提出  
 9月16日 23受府財第4号の956号により現状変更許可

### (2) 現地調査

- 8月15日 借上げ車両・借上げ仮設ハウス納品  
 8月16日 調査区設定作業開始  
 8月18日 発掘作業員雇用契約の締結、調査機材搬入、環境整備  
 8月19日 1-1調査区表土掘削開始  
 8月30日 1-2調査区設定  
 9月13日 館城跡調査検討委員現地指導  
 9月14日 第1回館城跡調査検討委員会会議  
 9月16日 文化庁記念物課近江俊秀調査官、北海道教育委員会文化スポーツ課田中哲郎主査現地指導  
 9月21日 1-2調査区表土掘削終了  
 9月22日 1-3調査区調査予定範囲草刈り  
 9月26日 1-3調査区表土掘削開始  
 10月5日 厚沢部町内小中学校初任者研修発掘体験  
 10月6日 1-1・1-2調査区調査完了  
 10月7日 1-1調査区埋め戻し作業開始  
 10月18日 町道上館城ノ岱線撤去工着工

- 10月19日 1-1調査区埋め戻し作業完了  
10月20日 町道上館城ノ岱線撤去工完了  
1-2調査区埋め戻し作業完了  
10月26日 2-1調査区道路東側法面拡張作業完了  
断面にて堀・柵列を確認  
11月2日 2-3調査区埋出  
11月8日 館城跡調査検討委員・参与現地指導  
11月9日 第2回館城跡調査検討委員会会議  
2-2調査区遺構埋め戻し作業完了  
11月10日 2-1調査区埋め戻し作業完了  
11月11日 調査器材洗浄・搬出  
作業員解雇  
11月12日 町道上館城ノ岱線復旧工着工  
11月18日 仮設ハウス等、貨物用普通自動車リース物品返却

### (3) 整理作業等

- 12月1日 整理作業員雇用開始  
遺物洗浄作業開始  
12月2日 遺物洗浄作業完了  
12月4日 南北海道考古学情報交換会（館城跡調査成果報告）  
12月8日 コンター図作成作業完了  
12月9日 遺構図版レイアウト作成作業完了  
12月16日 遺構図版トレース作業完了  
12月20日 遺物俯瞰写真撮影完了  
12月26日 遺構断面図版作成作業完了  
遺物断面実測作業開始  
12月28日 遺物断面実測作業完了  
12月30日 遺物断面トレース作業完了  
1月12日 遺物立面写真撮影完了  
1月24日 遺物実測図トレース作業完了  
1月27日 染付画像編集・図版貼り付け作業完了  
1月31日 発掘調査報告書印刷製本業務着手  
写真図版入稿  
2月10日 発掘調査報告書原稿入稿  
3月4日 平成23年度館城跡発掘調査成果報告会開催  
3月31日 発掘調査報告書刊行

## Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境

#### (1) 位置と地形（図1～3）

厚沢部町は、北海道南西部渡島半島に所在し、北緯 $41^{\circ} 47' \sim 42^{\circ} 03'$ 、東経 $140^{\circ} 09' \sim 140^{\circ} 28'$ に位置する。江差町、上ノ国町、木古内町、北斗市、森町、八雲町、乙部町と界を接し、町域は厚沢部川とその支流である安野呂川、鶴川の三河川の流域にまたがり、総面積は460.42km<sup>2</sup>、東西約29km、南北約27kmの広がりをもつ。

館城の所在する館地区（厚沢部町字新栄、字当路、字中館、館町、南館町、字城丘、字富里の總称で旧大字館村にほぼ一致する地域）は、東側を日本海と太平洋との分水嶺を形成する山塊、南側及び西側を梯子山、幌内岳、五郎助岳などの標高500m級の山々、北側を字中館のなだらかな丘陵地帯に囲まれた盆地である。盆地の規模は、古佐内川と厚沢部川の合流点付近の地峡から佐助沢、泉沢の合流地点までの東西約9km、南館の市街地から館町市街地までは南北約1.5kmである。

館城跡は、厚沢部川左岸の盆地の南西、厚沢部川とその支流である糠野川の合流地点から東へ約1kmに位置する。南方から延びる舌状台地上に立地し、遺跡周辺は南から北に向かって緩やかに傾斜する。遺跡の標高は約50mで、糠野川に面した平坦面からの比高差は約20mである。遺跡の北、西、東は開け、南は比高差約30mの小丘陵（通称「丸山」）となっている。

#### (2) 地質

館地区的地質は、新第三紀に形成された厚沢部層、館層、鶴層などのシルト岩や砂岩によって形成され、さらに、これらの基盤として、古生代の松前層群と中生代の上磯層群がある。新第三紀中新世前期には、グリーン・タフ変動に伴う火山活動により福山層の堆積があり、中新世中期の大規模な海進により、檜山層群が堆積する。厚沢部層の時期に現在の向斜軸（館城跡、鶴町市街地の東側をとおり、南北方向に延びるライン）より東側の沈降に伴って、多量の堆積物が形成された。

館盆地の中央部分では軟質の館層が広く分布することから、河川の浸食の影響を強く受け、広く開析された低平地が形成されている。字新栄から館町市街地にかけては、1段の河成段丘が形成され、現河床から約45～55mの比高差をもつ。段丘堆積物は、松前層群からの供給によるチャート・砂岩・粘板岩などの礫で構成される。館町、字当路、字新栄では沖積平地が発達し、厚沢部川の氾濫原を構成する（参考文献：北海道開発庁1970、工業技術院地質調査所1975）。

#### (3) 館城跡関連遺跡（図1）

館城跡及び箱館戦争関連遺跡として、①官軍の沢、②稲倉石古戦場、③鶴村古戦場、④丸山古戦場、⑤ロクロ場、⑥開墾役所跡、⑦米揚岱などがある。①は、明治2（1869）年に新政府軍の進撃路となつた沢、②～③は館城攻防戦にともなう古戦場、⑤～⑥は安政年間に設置されたとされる開墾役所跡とそこへ荷揚げした伝えられる地域である。⑦は館城跡に物資を荷揚げしたと伝えられる地域である。

②稲倉石古戦場は、明治元（1868）年11月10日、館城攻略のため箱館五稜郭を出陣した旧幕府軍一聯隊と松前藩との戦闘が行われた古戦場である。古戦場は、現在の鶴ダム築堤付近と推測され、ダム建設地に選定されたことから明らかのように、急峻な岩山からなる地峠である。この地点を旧幕府軍に突破された場合、その後は鶴川が開拓した平野が広がり、館城までの進撃を許すこととなる。松前藩としては館城防衛上、稲倉石の守備は必須であった。そのため、松前藩は谷底の道路を封鎖し、小口径砲数門を装備した陣地を構築していた。旧幕府軍による陣地の攻略は困難とみられたが、左右の岩山から

狙撃されたため、支えきれず陣地を捨てて敗走した。

③鶴村古戦場は、鶴村に宿陣した旧幕府軍の本陣を松前藩軍が強襲したことから起きた戦闘である。稲倉石で松前藩軍を敗走させた旧幕府軍は、11月13日鶴村（現字鶴）へ進軍し、ここに宿陣する。翌14日、2小隊を偵察のため館村へ派遣したところ、俄虫村（現本町・新町ほか）方面から進んできた松前藩兵が鶴村本陣を襲撃した。旧幕府軍は暫時の戦闘の後これを撃退している。

④丸山古戦場は、旧幕府軍の偵察隊と館城から進出した松前藩側の偵察隊との小競り合いである。11月14日、旧幕府軍が2小隊を偵察のため館村へ派遣したところ、鶴村から館盆地へと越える小丘陵において、松前藩兵と遭遇し、戦闘となつた。この戦闘では、旧幕府軍のラッパの音に驚き、松前藩兵が敗走したことが『麥叢錄』（菊地1998）などに記されているほか、松前藩側の証言からも確認されている（『櫻鳥一厚沢部町の歩みー』p448）。

⑤開墾役所跡は、館城築城以前に松前藩が設置したとされる役所の跡である。

## 2. 館城築城とその経緯

### （1）13代藩主崇広の死去と徳広の藩主就任

松前藩13代藩主松前崇広は、慶応2年4月に病死する（『北門史綱』巻六 永田1991）。

崇広の死後、12代藩主の嫡子徳広が藩主に就任するものの、病弱な徳広は政務を執ることができず、藩政の中枢は、松前勘解由など崇広時代の重臣らが掌握したままであった。こうした状況に反発する反勘解由派の藩士達が、『建言書』（『慶応二丙寅十一月旧寄合中より建言書』 江差町史編集室1979）を藩主徳広に上申した。これにより松前勘解由は家老職を辞すこととなるが、反勘解由派の蠣崎民部らは脱藩の罪に問われ、また、藩政は依然として勘解由派が取りしきっていた。

### （2）正議隊のクーデター

明治元（1868）年7月28日、反勘解由派の藩士達は、『正議隊建白書』（江差町史編集室1979）を藩主徳広に提出した。『建白書』を受けた徳広は、勘解由ほか4名の重臣の登城を差し止めたが、勘解由らはこれに従わず、町役所に諸士を呼び集め密議を行なつたという（『奉命日誌』 江差町史編集室1979）。

7月29日、江差奉行尾見維三が、江差在郷藩士らを率いて江差から出動し、8月1日に福山城下へ到着した（『慶応四年四月より行事見聞録』 江差町史編集室1983）。尾見は、かねてから江差在郷の藩士や江差商人団を反勘解由派に引き込んでおり、江差商人団が反勘解由派の資金源となつたとの見解がある（『江差町史』 第六巻通説二p5）。

尾見の到着により勢力を増した正議隊は、8月1日から勘解由派の粛清を開始した。一連の粛清は、9月24日の山下雄城の処刑をもって一段落し、勘解由派の主要人物のほとんどを殺害する結果となつた。

### （3）館城の築城

館城築城工事の経過は、勘定奉行兼作事方を任命された江差の豪商、関川重孝（平四郎）が残した日記によって、うかがい知ることが出来る（江差町史編集室1981）。以下、関川平四郎日記により、館城築城工事の様子を考える。

9月2日に館村の鈴木文五郎に宛てて遠眼鏡を送ったことが記されており、この時期に、担当者が現地入りしていたことを知ることができる。9月14日には、大工四十人・木挽十人が館へ向けて出立している。9月21日には、福山から大工棟梁孝次郎はじめ、下職28名が江差へ到着し、館へ向けて出立している。

また、9月12日頃から土木作業が開始されており、9月23日現在の延べ人工数は、1,525人工に達し

ている。9月28日現在の館城普請に係る人員は、大工棟梁浜田仁兵衛、幸治郎以下、大工小頭五人、木挽2人、平大工92人、下木挽21人、土方小頭7人、土方243人、人足183人となっている。

10月14日には、建具師3人が木材と共に館へ向かっており、また、10月16日には、間似合、唐紙、玉子などの襖材料が館へ送られており、館城普請は、内装作業へと移りつつあったことがわかる。

10月24日には、棟上げの儀式が行われたことが記されており、城内の重要な建物の棟上げが行われたことを知ることができる。10月26日には、七飯岬下での旧幕府軍と新政府軍との戦闘を受けて、三上超順や今井興之丞が、手勢を引き連れて木間にまで出張している。館城普請の最終的な結果については触れられていないが、関川重孝の築城日記もこの10月26日をもって終わっており、この前後に、館城の普請もほぼ終了していたと考えられる。

### 3. 館城跡の外郭線と遺構配置（図4）

これまでの発掘調査によって、館城跡外郭線は南辺、東辺については、その位置と形状が明らかになっている。西辺については、平成22・23年度の調査により町道上館城ノ岱線道路敷地内で堀・柵列が確認され北西部の一角のみ、所在が確認されていない。北辺は、北東部では堀・柵列が確認されているが、大半は未検出である。

館城跡の南東部から北西部にかけては、自然の沢状地形が形成されていたことが確認されている。沢状地形は礎石建物跡の検出されている館城跡中枢部を経由して、北東部の外郭線に接したところから方向を東西方向に変え、史跡外の「与惣吉沢」へと流入する。北辺の外郭線を形成した可能性も視野に入れ、調査を行っている。

礎石建物跡は平成21年度の地表面調査で検出されたもので3棟確認した。館城跡の御殿など中枢的な機能を担う建物の可能性が推測される。

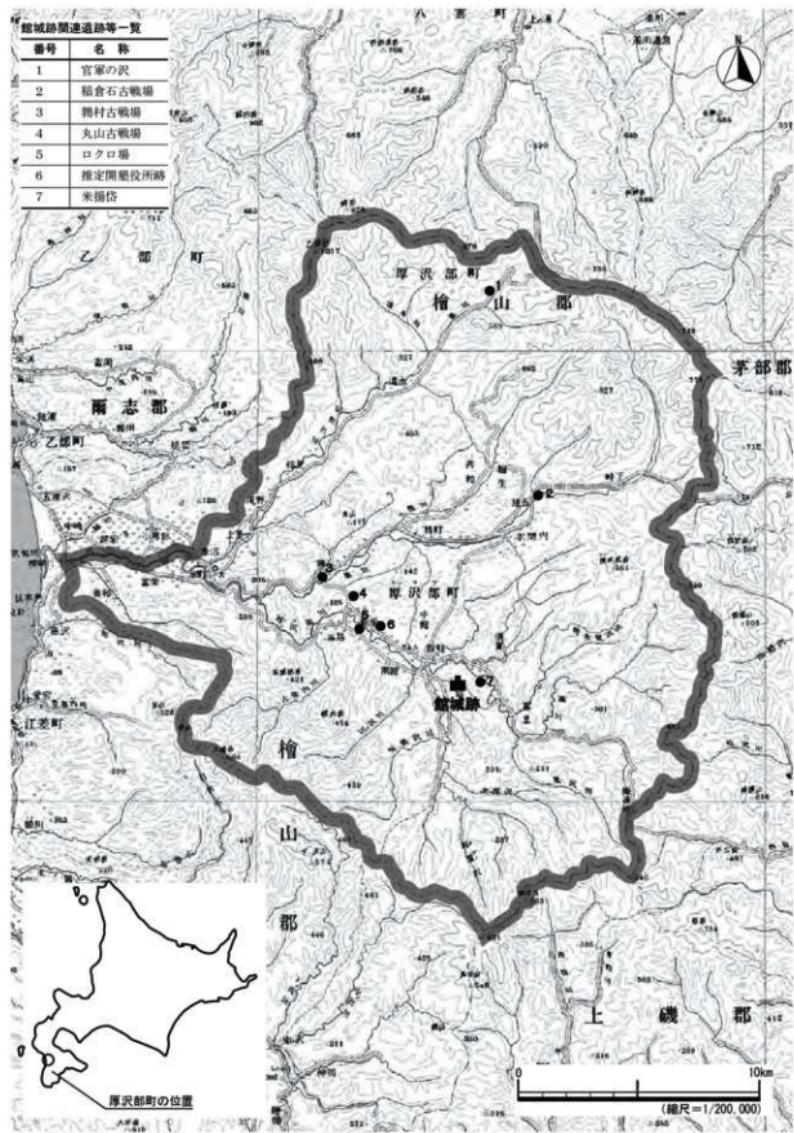


図 1 厚沢部町の位置と館城跡関連遺跡（国土地理院発行数値地図 200000（地図画像）6240、6340を合成して加筆）

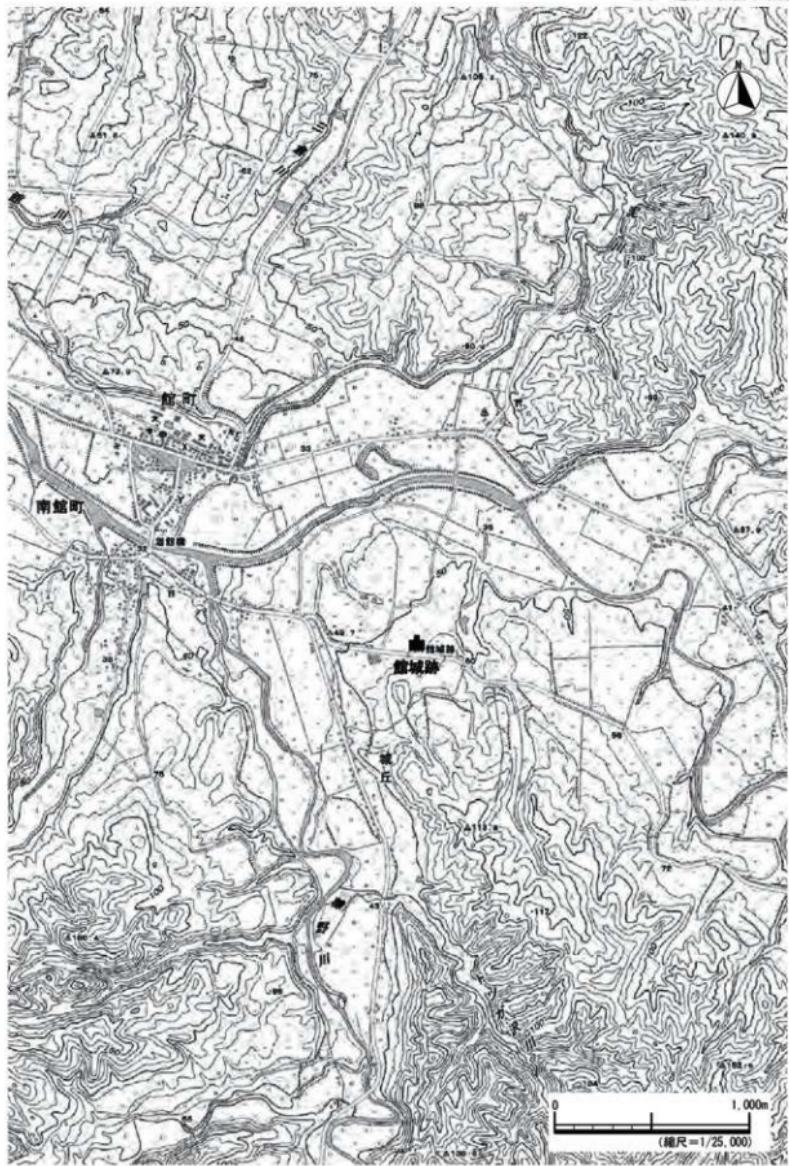


図2 館城跡の位置と周辺の地形（国土地理院発行数値地図 25000（地図画像）624062 に加筆）

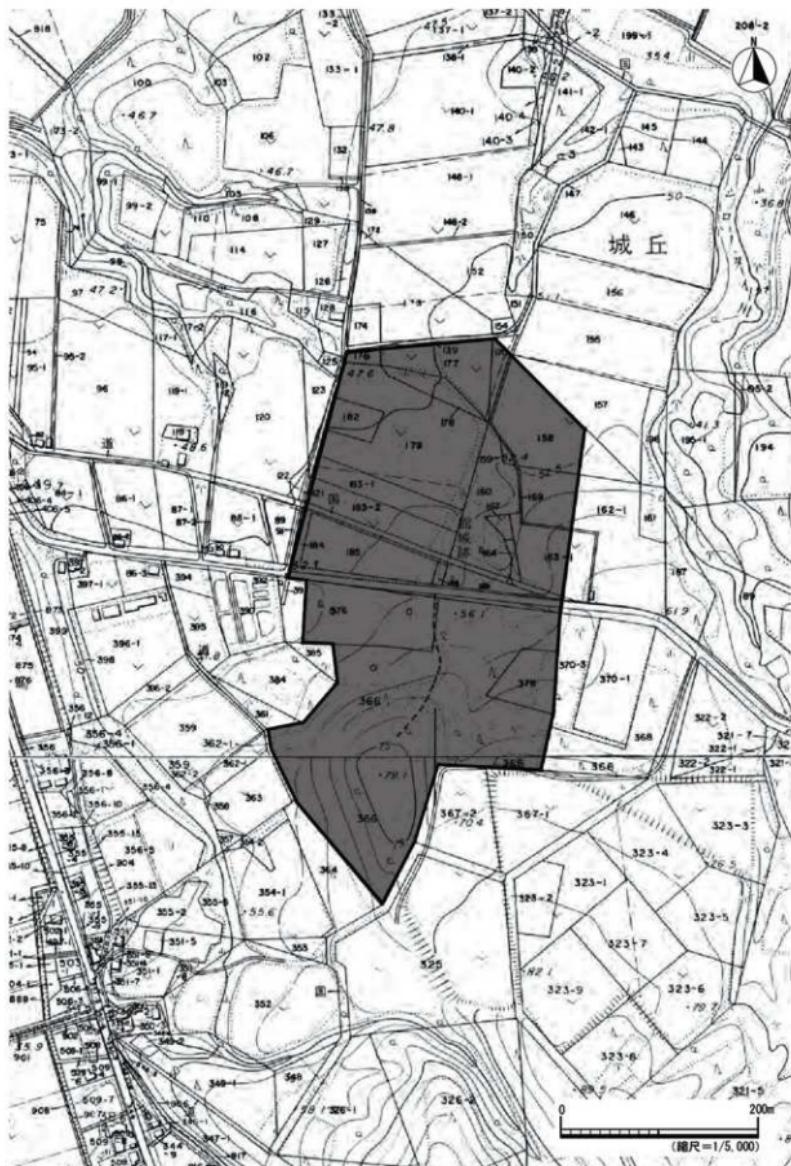


図3 指定地周辺の地形と指定範囲



図4 館城跡遺構配置図



## Ⅲ章 調査の方法

### 1. 発掘調査基線（図5）

館城跡の発掘調査基線は、平成17年度調査以来、1988年～1990年の発掘調査グリッドを踏襲することとしている。このグリッドは、平成14年の測量法改正以前の日本測地系（旧座標）平面直角座標系X I系に沿って設定された20m方眼を基本とし、南から北へ向かってA、B、C、・・・、東から西へ向かって0、1、2・・・としている。なお、Aラインより南側については、北から南へ向かって、Z0、Y0、X0・・・と表記する。

この方眼は、直交するラインの交点から北西の20m平方を、その交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称し（例：B-2）、さらに10m方眼の小グリッドに分割した。小グリッドは、グリッドの基点となる交点（杭の打設位置）から反時計まわりにa、b、c、dとした（例：B-2-c）。

今年度の発掘調査では、光波式トランシットを使用して現地測量を実施したことから、現地にグリッド方眼を示す杭は打設せず、それぞれの調査区の基線杭にトランシットを設置するか、基線杭から任意の位置に設置した基準杭にトランシットを設置して測量を行った。

各調査区で使用した基線杭は、平成17年に（有）安藤測量設計事務所に委託し、指定地内町有地及び指定地周辺の町道におよそ50m間隔で設置した下表の基線杭を利用した。下表の基準点を利用し、各調査区に近接した位置に実際の測量用の基準点を打設した。調査区に近接した基準点から、第1調査区ではK-5-dを、第2調査区では13ライン1を後視し、測量を行った。

表2 平成23年度館城跡発掘調査基準杭と座標（世界測地系平面直角座標X I系）

調査区名	基線杭名称	X 座標	Y 座標	標高	備考
第1調査区	H-5-c	-235493.584	7756.681	52.743	後視点
	K-5-d	-235443.584	7756.680	52.194	基準点
第2調査区	13ライン1	-235357.380	7606.677	49.146	基準点
	K-5-d	-235443.584	7756.680	52.194	後視点

### 2. 調査の方法

#### （1）掘削

第1調査区はすべて人力により表土掘削を行った。第1調査区の表土掘削及び沢状地形の掘削にはスコップ・ジョレンを用い、遺物密度の高い場所では、部分的に移植ごて等を使用した。

第2調査区は町道敷地に調査区を設定したことから、町道撤去及び復旧を請負工事により実施した。町道撤去工完了後、残土約10cmをスコップ・ジョレンで除去した。

2-1調査区東西に設けた拡張区及び2-3調査区について、全て人力により表土掘削を行った。

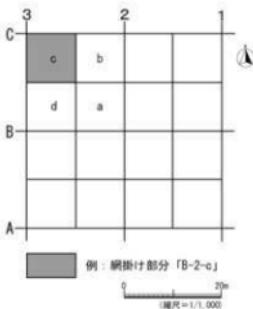


図5 グリッドの呼称方法

## （2）現地測量

全ての現地測量を、光波式トランシットを用いて行った。光波式トランシットは、TOPCON CS-102、データコレクタはTOPCON FC-7を使用した。取得データは、CADをベースとした遺跡管理用のソフトウェアで管理した。編集した図面は、DXF形式で出力し、ai形式（Adobe Illastrator形式）に変換後、修正や線の除去を行い、入稿用図面とした。

## （3）写真記録

写真記録は調査前、調査状況、遺構等検出状況、土層断面、調査終了状況等を撮影した。撮影機材は、Mamiya RB67 PROFESSIONAL SD（中判フィルムカメラ）+Mamiya KL65mmF4LとMamiya KL127mmF3.5L及びNikon COOLPIX P6000（コンパクトデジタルカメラ）である。中判カメラでは、120サイズのリバーサルフィルム（フジクローム プロピア100F（RDP III 120））を使用した。デジタルカメラは、4224×3228ピクセルのJPEG形式で撮影・保存した。

遺物撮影も同様のシステムを使用し、中判カメラではリバーサルフィルム（フジクローム プロピア100F（RDP III 120））を使用し、デイライト用のフラッドランプを使用した。

写真記録は、原則として、中判カメラ、デジタルカメラともに同一カットを撮影し、デジタルカメラでは、この他に、調査状況写真や途中経過写真等を撮影し、調査記録の一助として活用した。

## （4）1次整理

出土遺物は、調査終了後に水洗し、分類、一覧表作成、注記等の一次整理作業を行った。注記は遺跡名（TJ11）、層位、調査区名、取上げNo.の順に、白色のポスターカラーで記入し、その上にラッカーを塗布して保護した。

## （5）2次整理

光波式トランシットで作成した現地測量図面及び出土遺物の位置情報は、「遺跡管理システム」（シン技術コンサル作成）で管理した。遺跡管理システム上のデータには修正等は一切加えず、ai形式（Adobe Illastrator形式）に変換後、必要な訂正や変更を加え、報告書用印刷用図版とした。

遺物実測は、断面図及び平面の輪郭図を手書き実測し、素図をスキャナーで読み込みAdobe Illastrator（CS4）でトレースした。染付の文様は写真画像を編集し、貼付した。

写真記録のうち、リバーサルフィルムは、撮影順にフィルムシートに収納し、撮影時の記録（日付、撮影方向、撮影対象）をシールに記入し、シートの上からそれぞれのフィルムに貼付けた。デジタルカメラ撮影分は、リバーサルフィルムと同一カット及び重要なものについてL判（12.5cm×8.7cm）に出力し、アルバムに収納した。オリジナルデータは、DVD-Rに保存した。

## （6）保管

出土遺物は整理作業終了後に遺物登録台帳を作成し、掲載・非掲載、遺構・包含層・分類、出土グリッドなどの基準で分別して収納し、さらに、厚沢部町郷土資料館収蔵品として、コンテナ、ダンボールなどの梱包単位毎に「厚沢部町郷土資料館収蔵資料台帳」に登録した。

原図・素図等の図面類、写真記録は厚沢部町教育委員会で保管する。

## 3. 基本層序（図6）

基本層序の分類は、『館城趾 遺構確認調査報告書』（厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所1989年）のそれ（以下旧層序）を踏襲した。なお、基本層序の土色、土性は、平成17年調査の南側盛土西部（第1調査区）における断面観察の結果を基準としている（厚沢部町教育委員会2007-図8参照）。

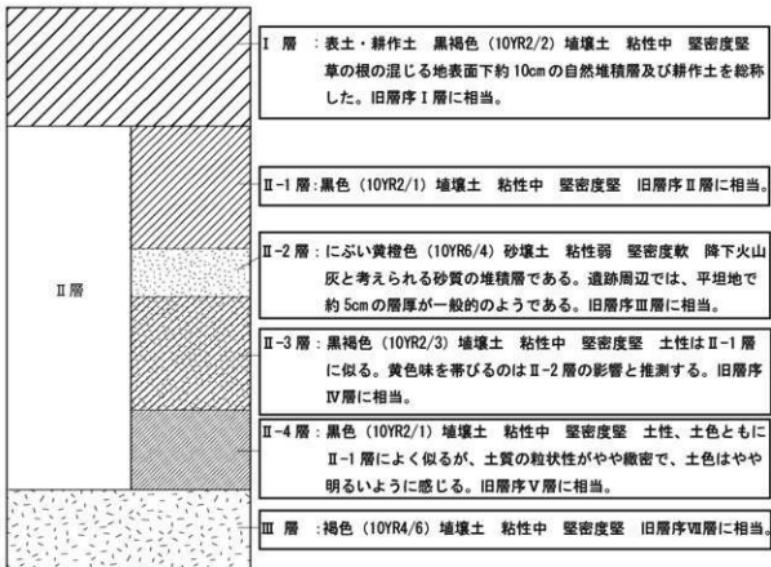


図 6 基本層序模式図



# IV章 遺構と出土遺物

## 1. 調査結果の概要

館城跡北辺及び西辺の外郭線の検出を目的として発掘調査を行った。

第1調査区は、平成21・22年度調査区で検出された自然の沢状地形の北側に位置し、これまで館城郭外と考えられ、調査が実施されてこなかったが、沢状地形が外郭線の一郭を形成していた可能性を検証するため、この北側の区域に3箇所の調査区を設けた。

第2調査区は平成22年度調査において町道上館城ノ岱線道路敷地内で堀が検出され、町道敷地内で屈曲し北へのびることから、この延長を確認するために3箇所の調査区を設けた。

表3 平成23年度調査の概要

調査区	面積(m <sup>2</sup> )	概要	
1-1	458.3	H21年度調査区の北側に隣接する。沢状地形を中心に、調査区全体では178点の遺物が出土した。1-2、1-3と比較して遺物出土量は多いが遺構は確認できない。包含層はⅢ層（黄褐色ローム層）まで削平されている。	史跡指定地内
1-2	90.4	8ライン付近にある標高差約1mの段差と流路に閉まれた範囲で、南側は沢状地形を埋め立てており、西側では、用水路の掘上げ土が盛られている。包含層の残存状況は良好だが、遺物はほとんど出土しない。遺構は確認できない。	
1-3	197.7	館城跡北西の低地に位置し、Ⅲ層下位を起源とする明黄褐色ロームによって、約1mの盛土がなされていた。予想以上の土量だったため、東側半分と調査区東端に幅1mのトレンチを設定し、遺構確認を行った。旧地形は自然の低湿地で、農地造成のために盛土を行ったようである。遺構・遺物は確認できない。	
小計	746.4		
2-1	253.1	東西方向に延びる堀と柵列を確認した。堀は調査区東側でいったん途切れるが、調査区東側拡張トレンチで断面を確認した。西側の拡張トレンチでは、堀は南北に延びており、北側の延長は道路側溝の堀方により破壊されており、確認できない。同様に、南北方向の堀と東西方向の堀の接点も搅乱が著しく判然としない。	史跡指定地外
2-2	329.5	堀と柵列を検出した。堀と柵列は、真芯距離で4.2mを保っており、これまで確認された堀と柵列の間隔に合致する。	
2-3	19.6	2-1調査区と2-2調査区西側の堀の方位が一致しないことから、屈曲点があるものと推測し、平成22年度調査区の西側の道路敷地を掘削した。検出した堀は明瞭な屈曲点をもたず、弧を描くように湾曲する。平成22年度調査区において検出した柵列も同様の弧状の平面形状であり、堀と柵は平行に弧状の湾曲を示す。	
小計	602.2		
合計	1,348.6		

## 2. 第1調査区（図7～16、写真1～8）

### （1）調査の概要（図7～8）

平成21年度、22年度調査において、館城の北辺を東西方向にのびる自然の沢状地形が存在したことが明らかとなった（図7参照）。これまでの発掘調査において設定された調査区はいずれもこの沢状地形の南側に位置しており、この区域では館城跡の外郭線は検出されていない。このため、平成23年度の調査では、沢状地形が館城北辺の外郭線を形成していた可能性を視野に入れ、沢状地形より北側の地域において遺構確認を行うこととした。

調査区は3箇所とした。いずれの調査区からも遺構は確認できなかった。1-1調査区の沢状地形からは遺物がまとまって出土している。1-2調査区、1-3調査区からはほとんど遺物が出土していない。

### （2）調査の手順（図7～8）

平成21年度調査区の北側で沢状地形を挟んで隣接する位置に1-1調査区（458.3m<sup>2</sup>）を設定した。1-1調査区西端から約30mのところで、比高差約1.5mの段差があり、この段差に沿って1-2調査区（90.4m<sup>2</sup>）を設定した。当初の調査予定はこの2箇所だけだったが、1-1、1-2調査区の掘削土量が当初予定を大きく下回ったことから、さらに西側の遺構確認を行うため、1-2調査区西側30mのところで1-3調査区（197.7m<sup>2</sup>）を設定した。

### （3）1-1調査区（図9～11、写真1～4）

調査区はほぼ平坦で、南北側に1.9%未満の下り勾配となる。旧耕作土の耕作深度は約20cmで、耕作土をスコップ・ジョレン除去した後、遺構検出を行った。調査区南西側では、沢状地形を検出した。沢状地形は、現況用水路に隣接しているため、用水路の水面レベルを下回らないように掘削した。耕作及び農地造成に伴う削平によって包含層にあたるⅡ層は残存しない。堀・柵列をはじめ、遺構は検出できなかった。

**暗渠と沢状地形：**土管の埋設された暗渠が沢状地形と切り合っている。平面で切り合い関係を精査した結果、沢状地形の自然堆積を切って暗渠堤方が掘り込まれ、沢状地形の埋め戻し堆積が暗渠堤方を埋める状況が確認できた。図10C-C' 断面土層1～2は沢状地形の埋め戻し堆積である。土層3は明黄褐色ローム粒を少量含み、暗渠堤方の崩落土である。土層4～6は暗渠堤方埋土である。

**土層：**図11A-A'は1-1調査区西壁の断面である。土層1は耕作土、土層2～3は沢頭の埋め戻し堆積、土層4～5は沢頭の自然堆積層、土層7～8は水路の掘り上げ土、土層9～13は沢状地形の埋め戻し堆積である。土層14は沢状地形の斜面崩落土である。図11B-B'は沢状地形と沢状地形の埋没過程で形成された焼土層の断面である。土層1～2は沢状地形の埋め戻し堆積で、土層A-A' 9～13層に相当する。土層3、5～7は沢状地形の自然堆積層である。土層4の焼土はこの自然堆積層中に形成されている。土層4の焼土は、凝灰岩様の砂塊と黒色土粒をまんべんなくブロック状に含み、また、上下の土層3、5との境界が明瞭であることから、別の場所で形成された廃棄焼土である。出土遺物の多くは土層3と5で検出されたことから、土層3～5は館城築城期を含む可能性があると判断し、花粉分析試料を採取した。土層5中には火山灰が含まれる。ブロック状で境界が明瞭であることから、二次堆積と判断する。この火山灰を採取し、火山灰同定試料とした。

**遺物：**沢状地形を中心に178点の遺物が出土し、平坦部にも一定の密度で遺物が分布する。1-2、1-3調査区と比較して遺物密度が高い。

**考察：**沢状地形は自然堆積と人為的な埋め戻しの2段階の埋没過程がある。土管を埋設する暗渠が自然堆積層を切って掘り込まれ、埋め戻し堆積層によって埋められていることから、沢状地形の埋め戻し堆積は、土管を埋設する暗渠が一般的となる昭和50年代以降と推測する。平坦部が広く削平されているこ

とから、この時期に、周辺の農地改良がなされ、沢状地形の埋め戻しと平坦部の削平が同時に進行したと推測する。館城期の遺物が沢状地形の自然堆積層から出土することから、沢状地形の自然堆積層は館城築城期を含んだそれ以降の時期に形成されたと考えられる。遺物は沢状地形から集中的に出土する傾向があるが、平坦部からも一定量出土している。このことから、本来、平坦部において廃棄された遺物が沢状地形に流れ込んだ可能性や、埋め戻しに伴って平坦部から移動された可能性がある。

#### (4) 1-2調査区（図12～13、写真5）

南と西に現況水路があり、L字状に水路に挟まれた区域に調査区を設定した。調査区西端は水路掘り上げ土と思われる人為堆積層が平面で確認できる。南側では、沢状地形に向かって落ち込む傾斜面となっている。斜面の傾斜は1-1調査区の沢状地形が約45°の急傾斜となっていたのに対しても1-2調査区では約20°となっている。旧耕作土の耕作深度は約20cmで、耕作土をスコップ・ジョレン除去した後、遺構検出を行った。包含層の残存状況は比較的良好で、調査区ほぼ全面でII層が残存する。堀・柵列等の遺構の検出はなかった。

**土層：**図13A-A' 土層1～2は黄褐色ローム粒を含む黒褐色土を主体とする。現況水路の掘り上げ土である。土層3は旧耕作土、土層4は基本層序II層に相当する自然堆積層、土層5は基本層序III層に相当する。

**遺物：**近代磁器を含む2点の陶磁器が出土した。

**考察：**1-1調査区と比較して、包含層の残存状況がよく、沢状地形も人為的な埋め戻しの痕跡がみられない。旧地形は、1-1調査区側から1-2調査区側（東から西）へ向かって緩やかに傾斜する平坦地と推測できる。昭和50年代の農地造成によって、1-1調査区側が削平され、残土を1-2調査区側へ盛土し、一部は沢状地形の埋め戻しに利用したことが推測される。遺物の出土密度が1-1調査区と比較して極端に少なくなっている、館城に関する痕跡は遺構・遺物ともに見出しがたい。

#### (5) 1-3調査区（図14～16、写真6～8）

1-1調査区、1-2調査区のある平坦面からは、約1.5m低位の平坦面である。前川農場所有『旧跡館城略図』にみえる「裏門」があると推定できる地域である。

調査区全体に0.5～0.8mの客土がなされており、当初の予想を上回る土量だったことから、全域を完掘することができず、客土の浅い東側の80mのみ客土を除去して調査を行った。調査区中央と西端にサブトレントを設定し、土層の断面観察を行った。沢状地形北側のラインは、調査区東側では調査区南端から5～8mのところで検出し、調査区西端のトレントでは、調査区より北側に位置し、調査区全域が沢状地形の中におさまる。

**土層：**図15A-A' 土層1は現況の表土、土層2～3は現況水路掘り上げ土、土層4～13客土で、このうち土層4～11は基本層序III層を起源とする黄褐色埴壙土を主体とし、土層12～13は基本層序II層を起源とする黒褐色土を主体とする。土層14～17は黒褐色～黄褐色土を主体とし、還元作用により、やや青みを帯びる。ローム粒を均一に含むことから人為堆積層であろう。客土以前の旧耕作土の可能性を想定する。図16B-B' 土層1は暗渠堀方、土層2は表土の残土、土層3～15は客土で、このうち土層3～10は基本層序III層を起源とする黄褐色～黄橙色埴壙土を主体とし、土層11～15は基本層序II層を起源とする黒褐色埴壙土を主体とする。土層16はローム粒を均一に含む人為堆積による黒褐色土である。客土以前の耕作土の可能性を想定する。

**遺物：**本調査区から遺物は出土していない。

**考察：**本調査区で検出した沢状地形は、西に向かうにしたがって北へ幅を広げている。また沢状地形の斜面の傾斜は、約20°となっており、1-2調査区同様ゆるやかな傾斜となっている。沢状地形底面のレ

ベルは図15A-A‘断面、図16B-B’断面ともに47.7mとなっており、ほとんど高低差がない。沢状地形の幅が大きく広がっていることと併せて考えると、この地域では、沢状地形の勾配はほとんどなく、客土以前の旧地形は、水の流れる沢状の環境ではなく、水のよどんだ湿地だったと推測する。調査区全域で確認された客土は、沢状地形を埋め立てて、平坦な地形を造成することを目的として行われたと推測され、透水性に乏しいⅢ層起源の埴土が主体となることから、水田造成を目的とする客土と理解できる。客土の下位で確認した人為堆積層は、客土以前の耕作土と考える。

### 3. 第2調査区（図17～26、写真9～22）

#### （1）調査の概要

平成22年度に町道上館城ノ岱線道路敷地内に3箇所設定した調査区の間に2箇所の調査区を設定し、北側を2-1調査区、南側を2-2調査区とした。さらに、2-1調査区、2-2調査区の間で平成22年度調査区の西側に2-3調査区を設定した。

2-1調査区では東西方向にのびる堀と柵列を検出し、東側は史跡指定地境界を越えて指定地内へのびていることを確認した。西側は、道路側溝の西側までのびていたため、道路敷地境界付近まで調査区を拡張したところ、南北にのびる堀と接していることを確認した。

2-2調査区では平成22年度調査区で検出された堀の延長を検出するとともに、その東側4.2mのところで柵列を検出した。堀・柵列は町道から約13°西偏し、2-2調査区北側では、道路側溝の西側へのびる。

2-1調査区、2-2調査区で検出した堀の方位が一致しないことから、この連続性を確認するために、2-1・2-2調査区間の道路側溝西側に2-3調査区を設定した。2-3調査区で堀は湾曲し、2-1・2-2調査区で検出された堀とつながることが明らかになった。

#### （2）調査の手順

2-1調査区、2-2調査区は、町道上館城ノ岱線の道路舗装及び路盤材をバックホウにて撤去後、人力にて残土除去、遺構検出を行った。当初の掘削予定は、町道敷地のうち、道路側溝に挟まれた部分のみだったが、2-1調査区では堀・柵列が調査区外へのびたことから、道路敷地範囲内で西側約2m、東側約1.5m調査区を拡張した。

2-3調査区は全て人力で掘削した。

調査終了後は、遺構及び2-1調査区の東西拡張部分、2-3調査区を人力で埋め戻し、それ以外の部分については、町道復旧工事により埋め戻し、道路復旧を行った。

#### （3）2-1調査区概要と土層（図18、21～22、写真9、10～14）

調査区は北へ5.6%の下り勾配となる。遺構面の削平深度は低いものの、暗渠や路床排水、旧道側溝、旧道路床砂利層などの搅乱が多くみられた。調査区南側で東西方向にのびる堀を確認し、その南側約4.2mのところで柵列を検出した。堀は調査区内で途切れるが、道路側溝東側の法面（C-C'断面）で断面が確認できることから、さらに東側へのびているようである。同様に柵列も法面（C-C'断面）で断面が確認できる。

調査区西側では、堀は道路側溝を越えて西へのびている。道路側溝西側の拡張区ではこれと68.1°の角度で西偏する南北方向にのびる溝を確認した。東西方向の堀との切り合い関係は、道路側溝とその堀方によって搅乱されており判然としない。南北方向の溝は2-3調査区で検出された堀の延長にあたり、これと同一遺構と判断した。

南北方向の溝は、東西方向にのびる堀との接点を越えて北へのびている。北端は道路側溝の堀方によって搅乱されており確認できない。

東西方向の堀は、真北から $81.1^{\circ}$  東偏し、南北方向の堀は、真北から $19.1^{\circ}$  東偏する。柵列は、東西方向の堀の南側に位置し、約4.2mの距離で並行する。平成22年度調査区にて検出された柵列から $65.1^{\circ}$  東偏する。屈曲部は検出されておらず、調査区間の未掘削部分で屈曲したものと推測する。

**土層：**図21A-A' 土層1は現表土、土層2は現道路の路盤砂利層、土層3～4は現道路の路盤材、土層5～6は旧道路の路盤層で固く締まる。土層7は旧道路側溝の埋土、土層8～10は旧耕作土である。図21B-B' 断面土層1は現表土、土層2、4は道路側溝掘削に伴う掘り上げ土、土層5～8は旧耕作土である。土層9はくぼみに堆積した火山灰、土層10は基本層序II-2層、土層11は基本層序II-3層である。図22B-B' 断面土層1は表土、土層2～5は堀の埋土で全て自然堆積である。土層6～8は柵列の埋土で、土層6は柱痕、土層7～8は堀方埋土である。土層10は基本層序II～III層の漸移層、土層11は基本層序III層である。

**遺物：**調査区全体で近代磁器1点を含む3点の遺物が出土した。

#### (4) 2-1調査区堀分岐部分（図19、21、22、写真16～17）

調査区西端では東西にのびる堀と南北にのびる堀が接していると予想されたが、道路側溝とその堀方によって搅乱され、確認できない。

**東西の堀：**検出面での幅0.9m、坑底幅0.6m、検出面からの深さ0.2mである。坑底は平らで壁は湾曲しながら立ち上がる。南北にのびる堀と接する西端部分は、道路側溝の堀方によって搅乱されている。道路側溝堀方東側及び西側の法面を利用して断面を確認した（図22D-D' 断面、図22E-E' 断面）。

**南北の堀：**東側の壁面が道路側溝堀方により搅乱されていたため、検出面での幅は不明、坑底の幅は0.5mである。坑底は平らで壁は外傾して直線的に立ち上がり、坑底から約0.2mのところから角度を変え、緩やかに立ち上がる。北側の延長は道路側溝堀方に搅乱され確認できない。調査区北端や道路側溝断面では検出していない。

**土層：**図22D-D' 土層1～2は旧耕作土、土層3～6は堀の埋土である。土層3は人為的な埋め戻し堆積層、土層4～6は自然堆積である。図22E-E' 土層1は南北にのびる堀の埋土で、土層2は東西にのびる堀の埋土と推測する。土層3は基本層序III層である。図22F-F' 土層1は表土、土層2は道路側溝堀方埋土、土層3は旧耕作土、土層4～8は堀の埋土でいずれも自然堆積層である。土層9は基本層序II-3層、土層10は基本層序II-4層に相当する自然堆積層である。

**考察：**東西にのびる堀が明瞭に確認できるのは、図19に示したD-D' 断面までで、それより西側では道路側溝堀方による搅乱のため、平面では確認できない。また、南北にのびる堀の西側にはのびていないようである。図22E-E' 断面によりIII層を掘り込む遺構が確認されている。東西にのびる堀のラインの延長上に位置しており、東西にのびる堀が南北に延びる堀の東壁を掘り込んだものと考える。南北にのびる堀の埋土（E-E' 土層1）が東西にのびる堀（E-E' 土層2）の上位に堆積する。東西にのびる堀が南北にのびる堀の埋土を切って掘り込まれている可能性も否定できないが、埋没堆積の順序を示すものと理解する。

#### (5) 2-1調査区堀・柵列拡大（図20、22、写真18～19）

東西にのびる堀が調査区東側で途切れ、さらに、柵列が道路側溝堀方に切られていることから、道路側溝東側の法面を垂直に掘削し、断面確認を行った（図22H-H' 断面）。柵列は10cm掘り下げて精査し、柱痕検出作業を行った。

**堀：**検出面での幅0.9m、図22G-G' 断面での坑底幅は0.6m、検出面からの深さは0.25mである。坑底は平らで、壁は外傾し、直線的に立ち上がる。

**柵列：**調査区東側で道路側溝堀方に搅乱を受けている。道路側溝堀方のところで北～ $59.6^{\circ}$  方位を変

え、2.7mのところで途切れる。柱痕は直径10～15cmで、確認できたものは全て円形で、方形のものは確認できない。

**土層**：図22G-G' 土層1～5は堀の埋土でいずれも自然堆積層である。図22H-H' 土層1は柵列柱痕である。土層2は柵列堀方、土層3は基本層序III層である。

**考察**：堀は本区域においていたん途切れる。3.2m東のC-C' 断面では堀が確認できることから、出入口の可能性がある。柵列についても北へ方位を変えているが、C-C' 断面には現れている。堀同様出入口構造を示すものかもしれない。

#### (6) 2-2調査区（図23～25、写真20～21）

平成22年度調査区に隣接する調査区の南端で、堀を検出した。堀の東側4.2mのところで柵列を検出した。

**堀**：検出面の幅0.9m、真北から6.7° 東傾する。町道敷地の方位とずれがあるため、Mラインの手前約2mのところで、道路側溝堀方の搅乱を受けている。この延長を確認するために2-3調査区を設定した。

**柵列**：検出面の幅0.3～0.4m、検出面からの深さ0.4m、坑底の幅は0.3mである。Mラインの南側1mのところから、約4mの区間は搅乱のため確認できない。柱痕は、平面形を確認できたは全て円形又は横円形で、方形と認められるものはない。

**土層**：図25A-A' 土層1～2は現表土、土層3は現道路の路盤砂利層である。土層4～5は現道路路盤材である。土層6は旧道側溝の埋土、土層7～9は旧耕作土、土層10は旧道路の路床層で固く締まる。土層11は柵列堀方、土層12は基本層序III層である。図24B-B' 土層1～2は柵列柱痕、土層3～4は柵列堀方である。

**遺物**：16点の遺物が出土した。堀の検出面付近で近代磁器、ビール瓶（掲載No. 22）等8点が出土した。

#### (7) 2-3調査区（図26、写真22）

2-1調査区の南北方向にのびる堀と2-2調査区の堀の方位が一致しないこと、2-2調査区北側で、堀は町道側溝の西側へのび、平成22年度調査区西側を南北にのびていると考えられたことから、平成22年度調査区西側に本調査区を設定した。

**堀**：検出面での幅0.7mで、明瞭な屈曲点をもたず湾曲しながら方位を東へ変える（真北から東偏17.4°）。

**考察**：平成22年度調査区検出の柵列との間隔は約4mで、他の箇所で確認された堀と柵列の間隔にほぼ一致する。湾曲の状況もよく似る。

**遺物**：7点出土した。うち6点は堀上面で出土した薬瓶（掲載No. 23）、ビール瓶である。

### 4. 調査区出土遺物（図27～28、表4、写真23～26）

1～18は磁器である。

1～5は碗蓋である。1は外面草花文と蝶が描かれ、口縁部内面に雷文が巡る。2は外面に草葉文が描かれ、口縁部内面に雷文が巡る。3は外面に松竹梅が描かれ、口縁部内面に雷文が巡る。4は外面に花文と波、見込みに松竹梅文が描かれる。5は外面に連弁文、高台外面に櫛歯文、内面見込みに松竹梅文が描かれる。

6～17は碗で、6～12は端反碗、13は丸碗である。6は外面に草葉文が描かれ、口縁部内面に雷文が巡る。7は外面に花文と波が描かれ、口縁部内面に雷文が巡る。8は外面に草花文が描かれ、口縁部内面に雷文が巡る。9は外面に綾縞と花文、窓が描かれ、口縁部内面に雷文が巡る。10は外面に花文が描かれ、口縁部内面に雷文が巡る。11は外面に草花文と窓が描かれ、口縁部内面に雷文が巡る。12は無文。13は外面に松葉と亀甲、亀甲内に花文が描かれ、口縁部内面に雷文が巡る。14は外面に草花文、見

込みに松竹梅文が描かれる。15は外面に松葉と花文が描かれ、見込みに「寿」字が書かれる。16は外面に草花文が描かれ、高台内に落款風の「青」と思われる文字が書かれる。17は外面に縦縞と唐草文が描かれ、見込みに「寿」字が書かれる。

18は紅皿である。型押し成形される。

19～21は陶器である。19は土瓶で外面青緑色に施釉される。20は鍋である。21は肥前系のすり鉢である。

22～23はガラス製品である。22は透明な瓶で薬瓶であろう。23はビール瓶で肩部に「TRADE MARK」の陽刻、体部下段に「DAINIPPONBREWERY CoLTD」の陽刻がある。「大日本麦酒」(1906～1949)のビール瓶である。

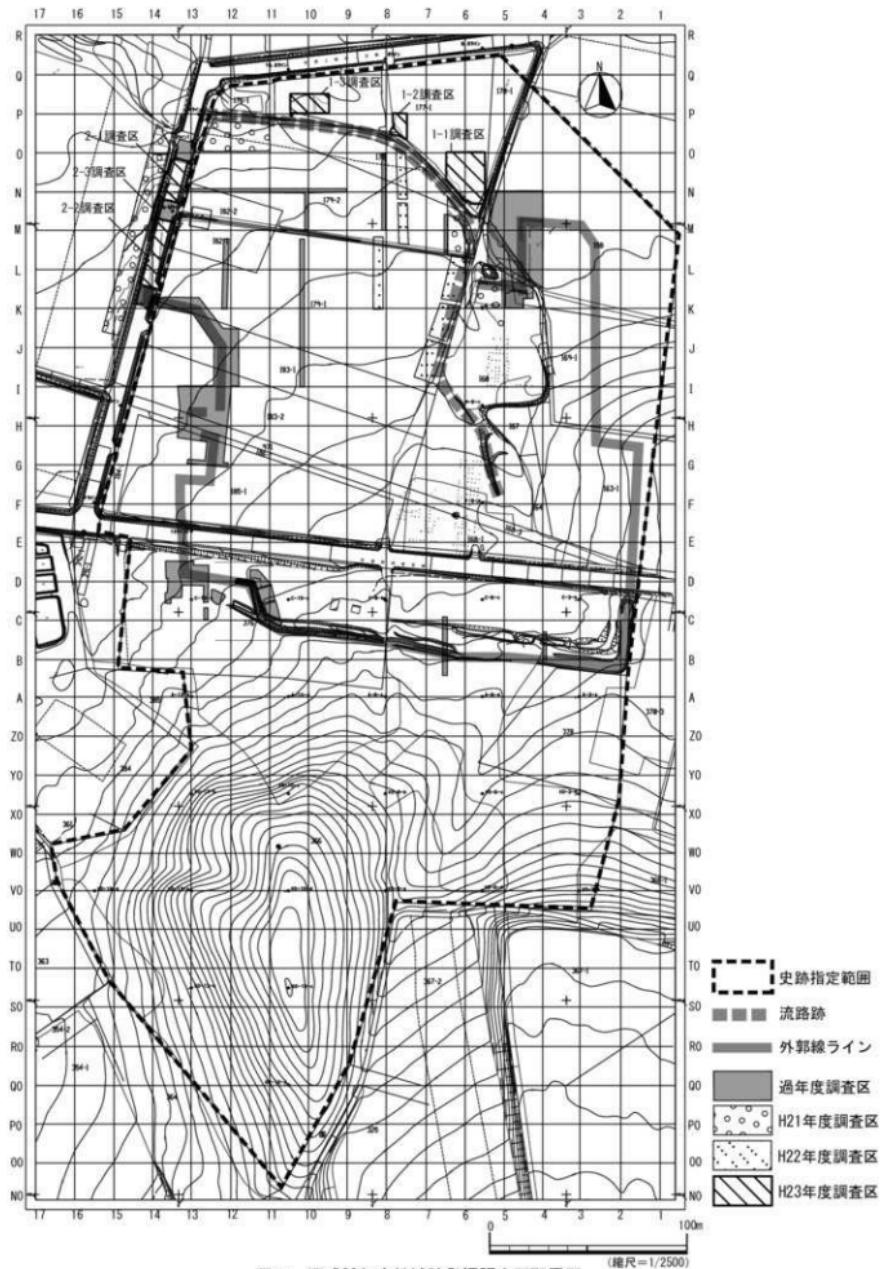


図 7 平成23年度館城跡発掘調査区配置図

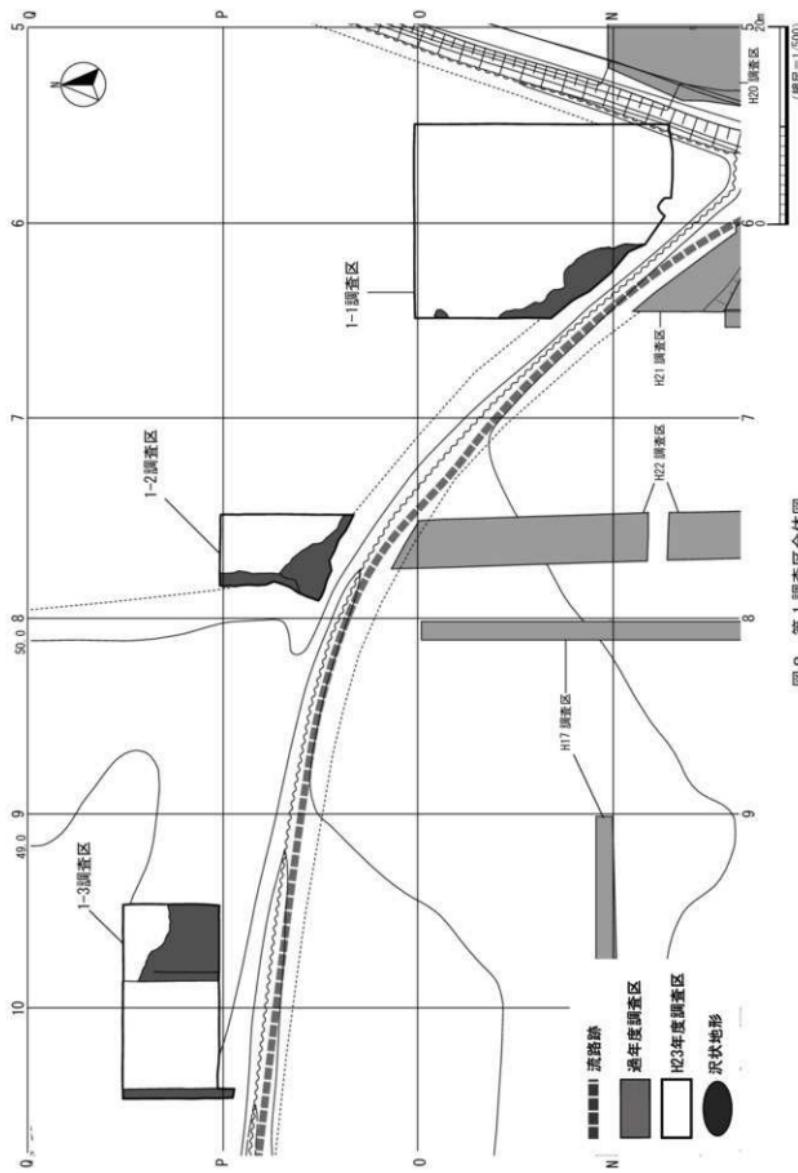


図 8 第1調査区全体図

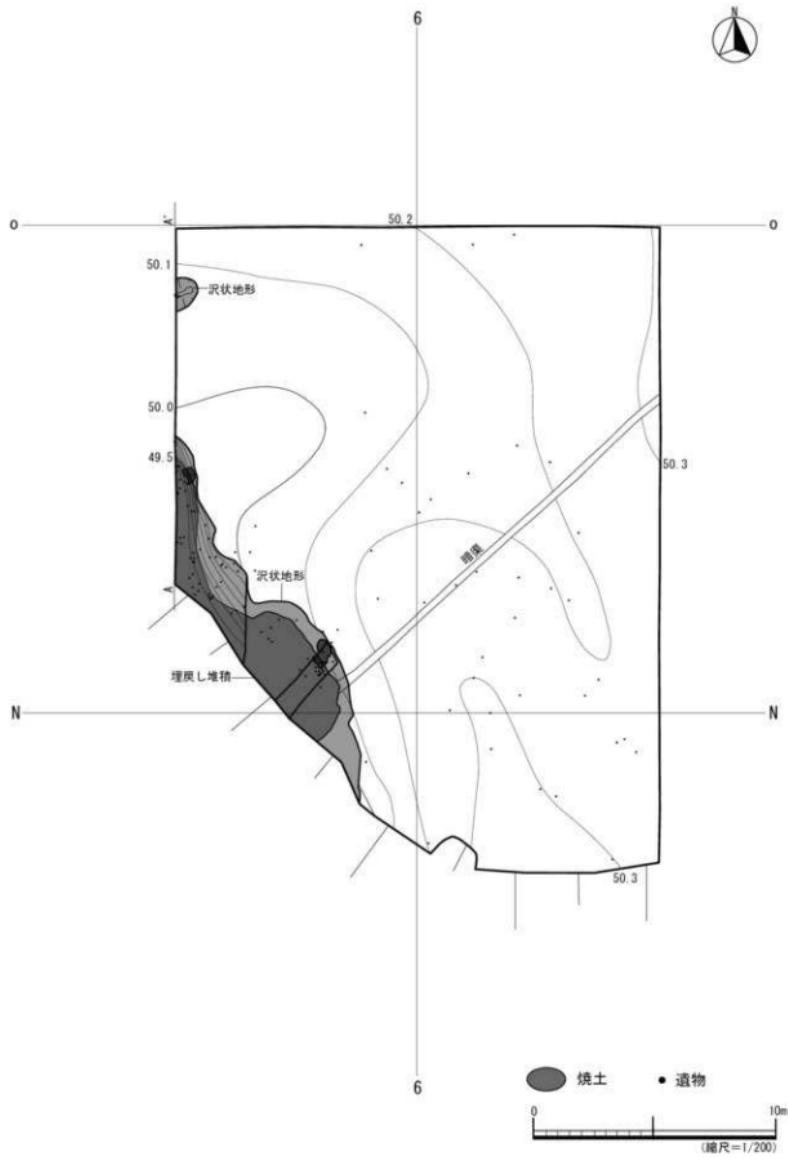


図9 1-1 調査区平面図

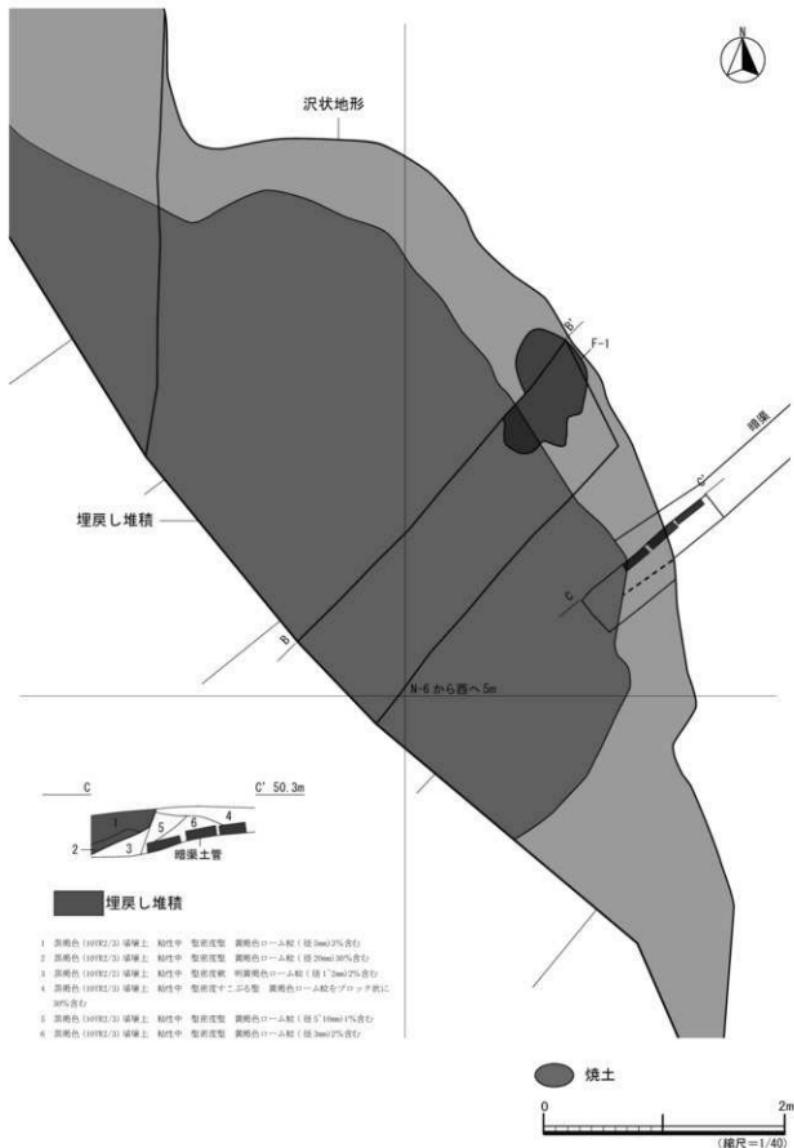


図 10 1-1 調査区沼状地形

50.5m

A



A' 50.5m



28

B

E 52.3m



花粉分析試料 No. 2 火成岩風化試料

- 1 浅根系 (10月22日) 被覆土：砂質中 埋戻し堆積 黄褐色ロードベーク (15.3 ~ 16.0m) (5%) (赤)
- 2 深根系 (10月22日) 被覆土：砂質中 埋戻し堆積 黄褐色ロードベーク (15.3 ~ 16.0m) (5%) (赤)
- 3 開根系 (10月22日) 被覆土：砂質中 埋戻し堆積 黄褐色ロードベーク (15.3 ~ 16.0m) (5%) (赤)
- 4 上層土 (10月22日) 被覆土：砂質中 埋戻し堆積 黄褐色ロードベーク (15.3 ~ 16.0m) (5%) (赤)
- 5 地上部 (10月22日) 被覆土：砂質中 埋戻し堆積 黄褐色ロードベーク (15.3 ~ 16.0m) (5%) (赤)
- 6 地下部 (10月22日) 被覆土：砂質中 埋戻し堆積 黄褐色ロードベーク (15.3 ~ 16.0m) (5%) (赤)
- 7 地上部 (10月23日) 被覆土：砂質中 埋戻し堆積 黄褐色ロードベーク (15.3 ~ 16.0m) (5%) (赤)
- 8 地下部 (10月23日) 被覆土：砂質中 埋戻し堆積 黄褐色ロードベーク (15.3 ~ 16.0m) (5%) (赤)
- 9 地上部 (10月23日) 被覆土：砂質中 埋戻し堆積 黄褐色ロードベーク (15.3 ~ 16.0m) (5%) (赤)
- 10 地下部 (10月23日) 被覆土：砂質中 埋戻し堆積 黄褐色ロードベーク (15.3 ~ 16.0m) (5%) (赤)
- 11 地上部 (10月23日) 被覆土：砂質中 埋戻し堆積 黄褐色ロードベーク (15.3 ~ 16.0m) (5%) (赤)
- 12 地下部 (10月23日) 被覆土：砂質中 埋戻し堆積 黄褐色ロードベーク (15.3 ~ 16.0m) (5%) (赤)
- 13 地上部 (10月23日) 被覆土：砂質中 埋戻し堆積 黄褐色ロードベーク (15.3 ~ 16.0m) (5%) (赤)
- 14 地下部 (10月23日) 被覆土：砂質中 埋戻し堆積 黄褐色ロードベーク (15.3 ~ 16.0m) (5%) (赤)



図 11 1-1 調査区西壁・沢状地形断面

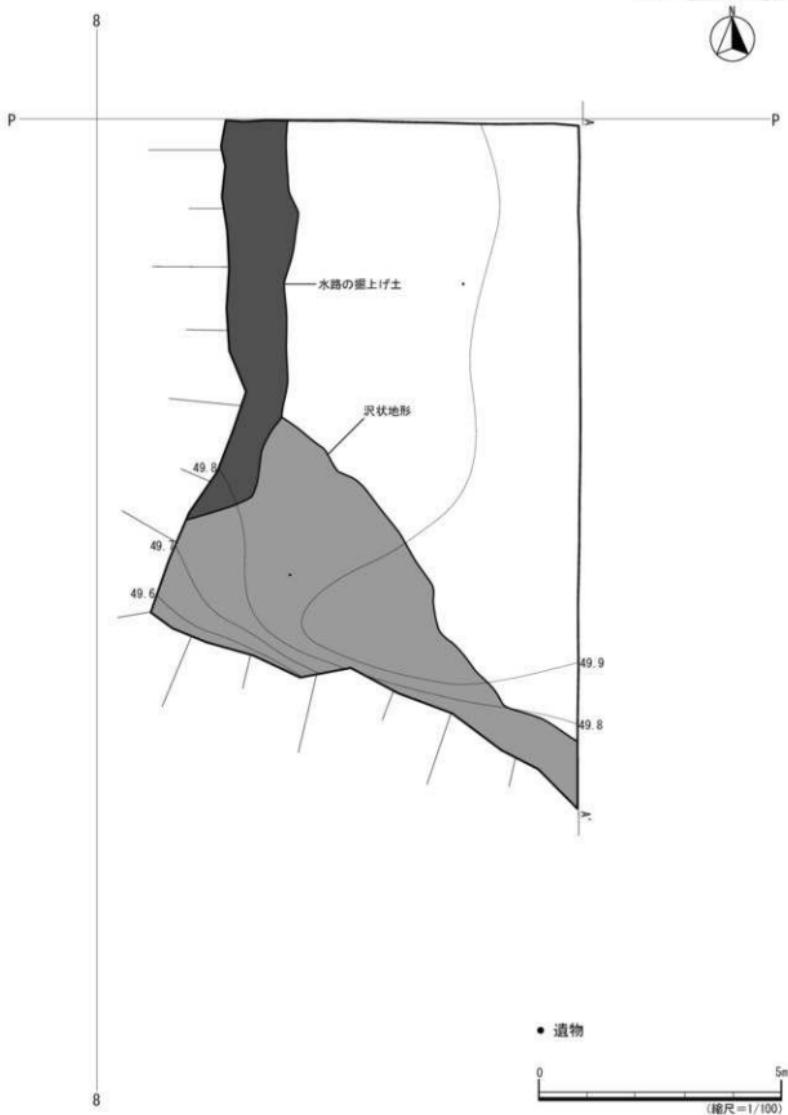


図 12 1-2 調査区平面図

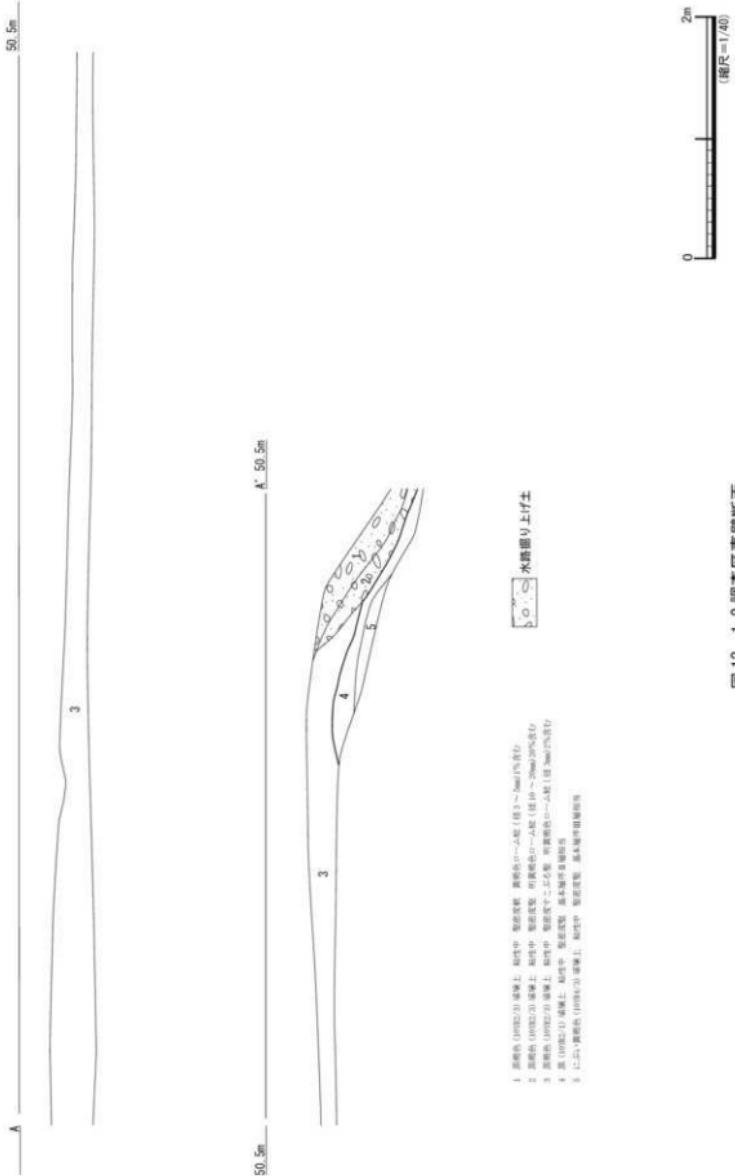


图 13 1-2 调查区東壁断面

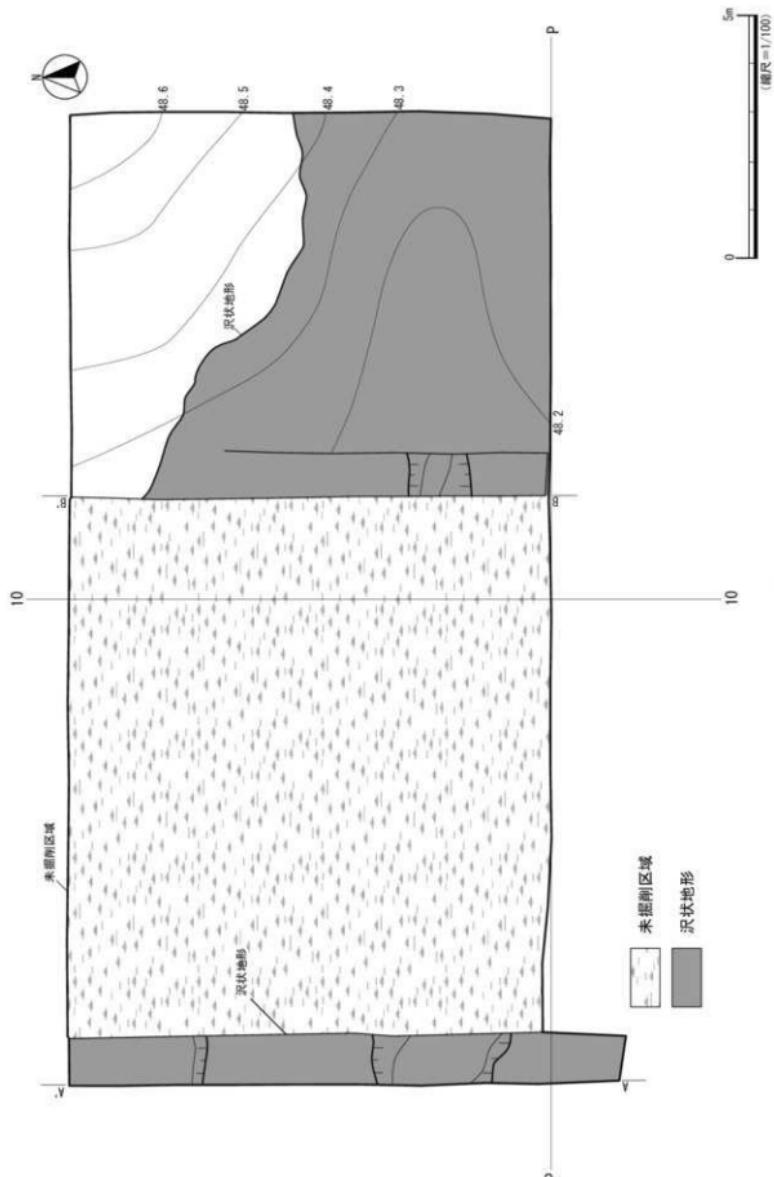


図 14 1-3 調査区平面図

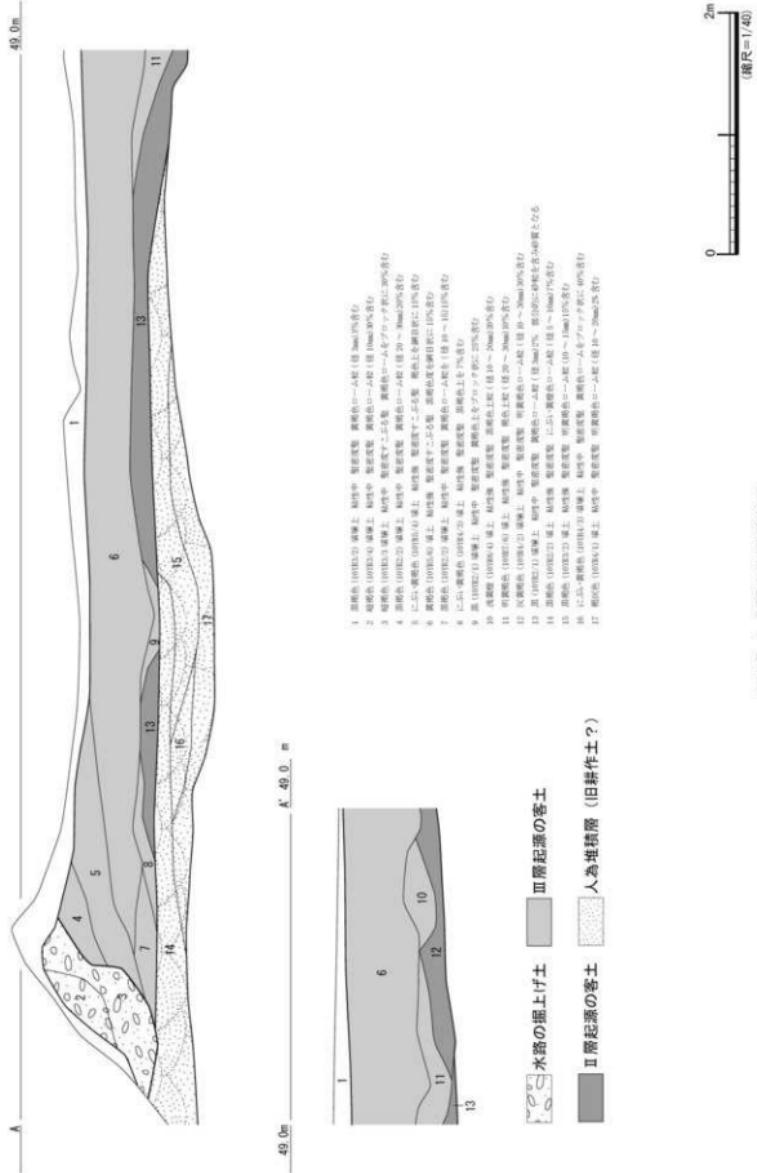


図 15 1-3 調査区西壁断面

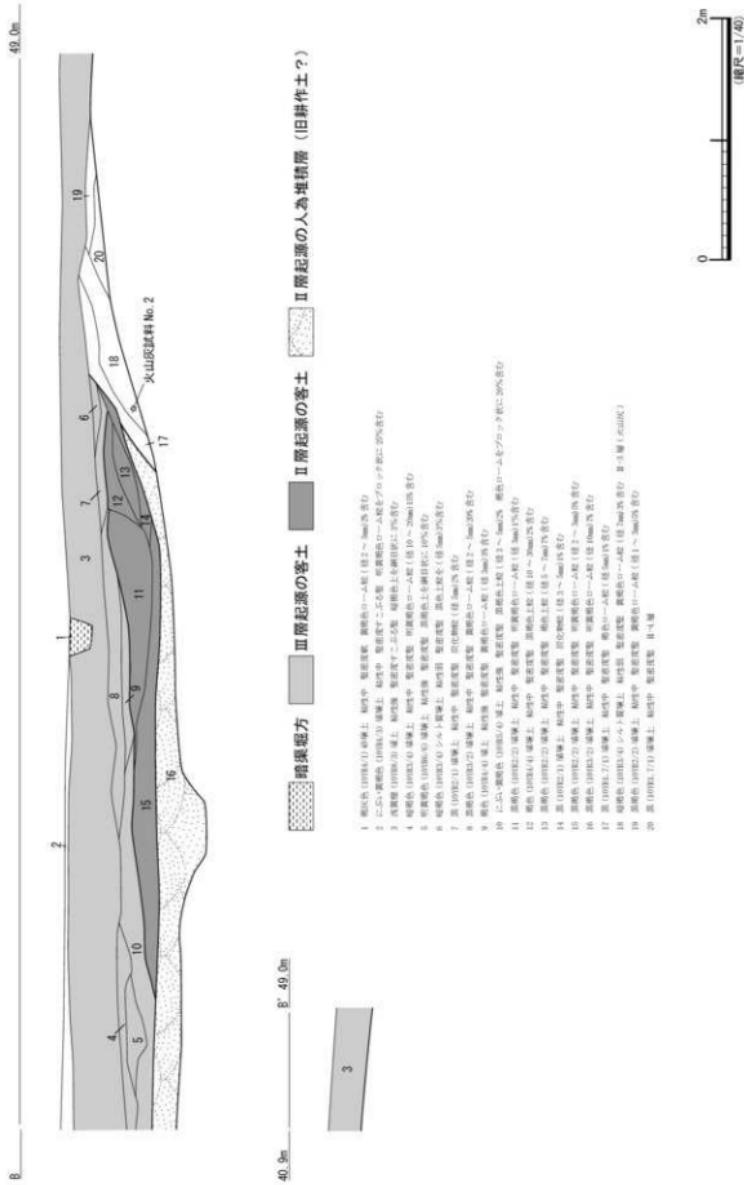


図 16 1-3 調査区中央トレンチ断面

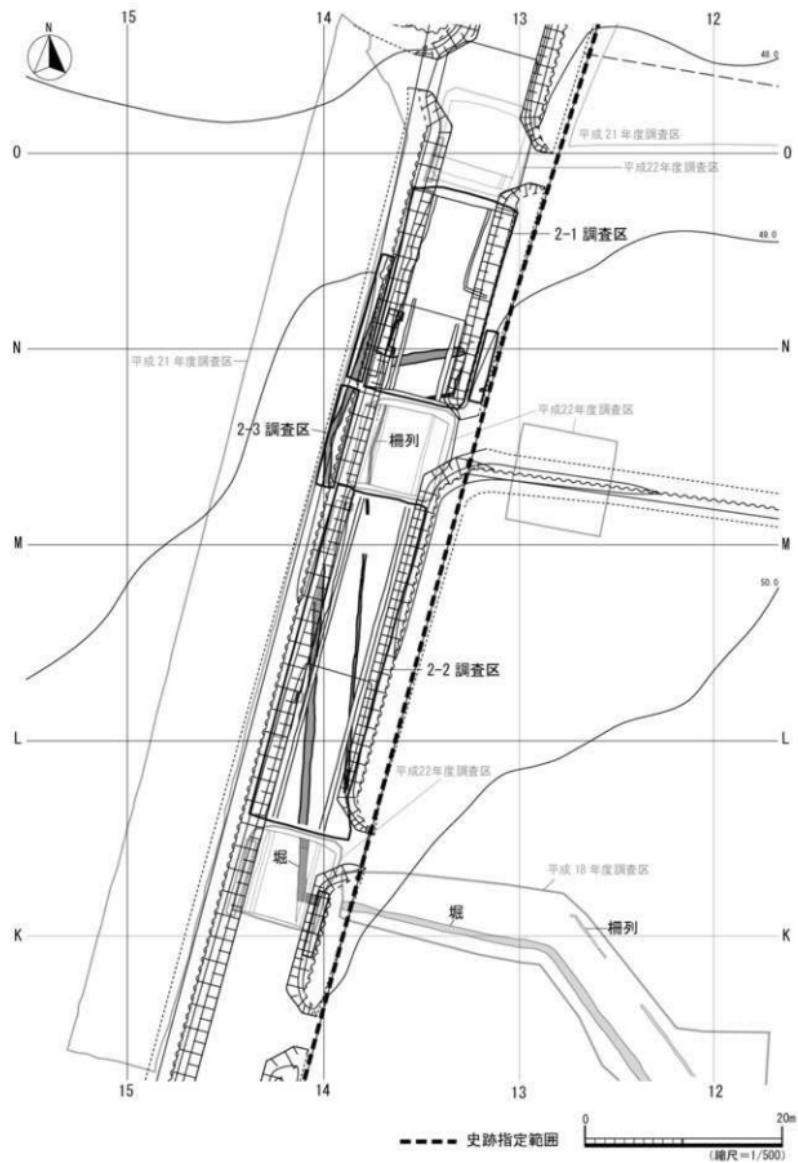


図 17 第2調査区全体平面図

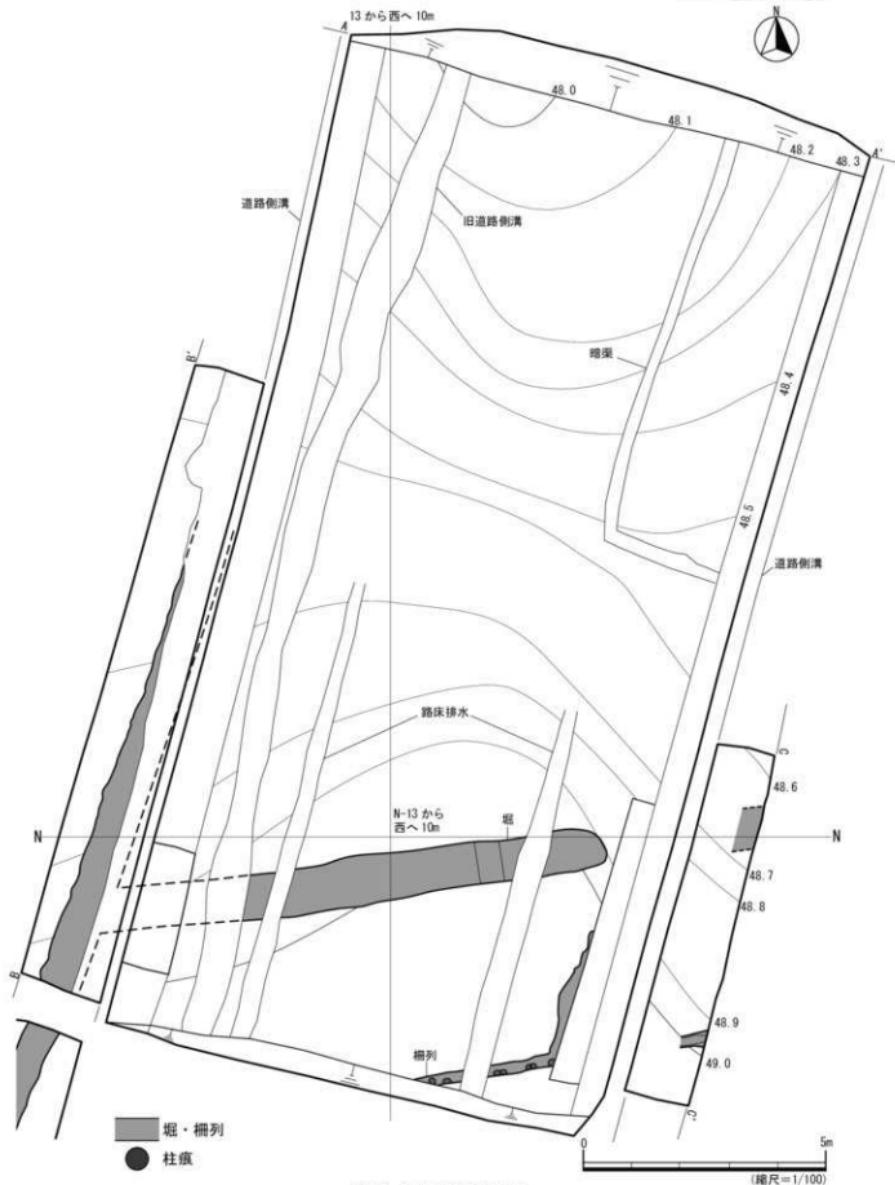


図 18 2-1 調査区平面図

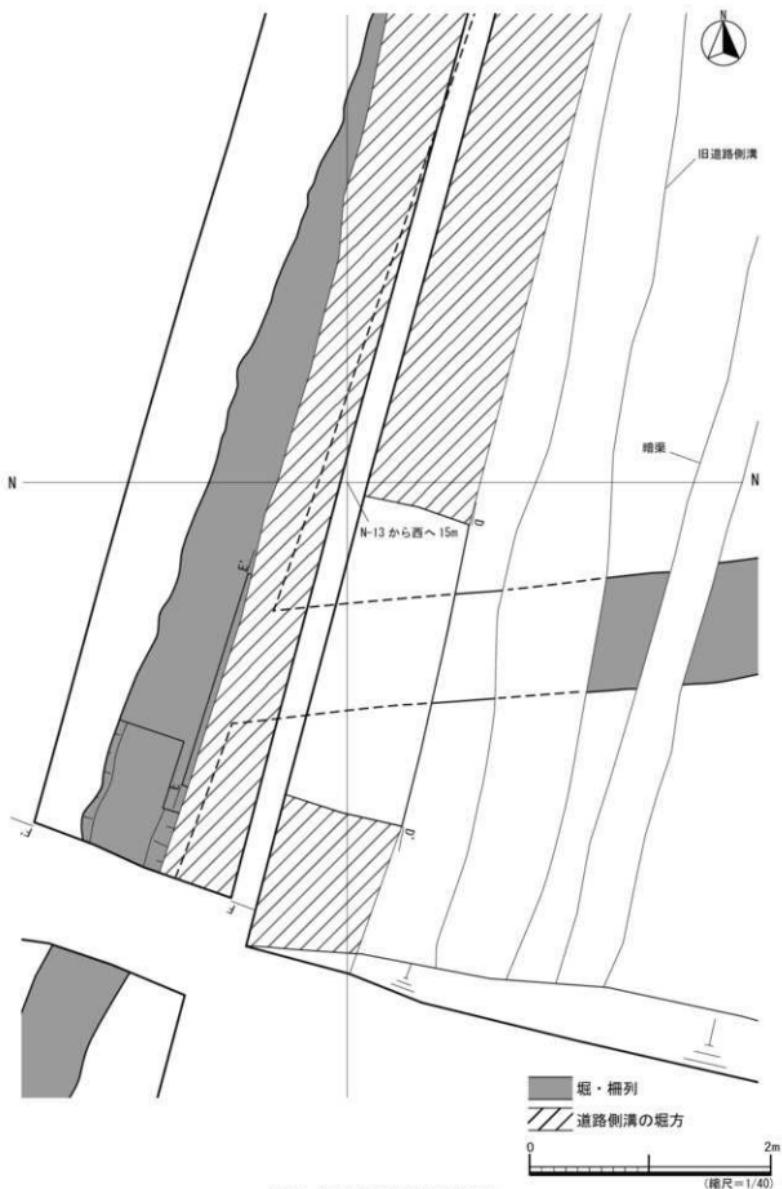
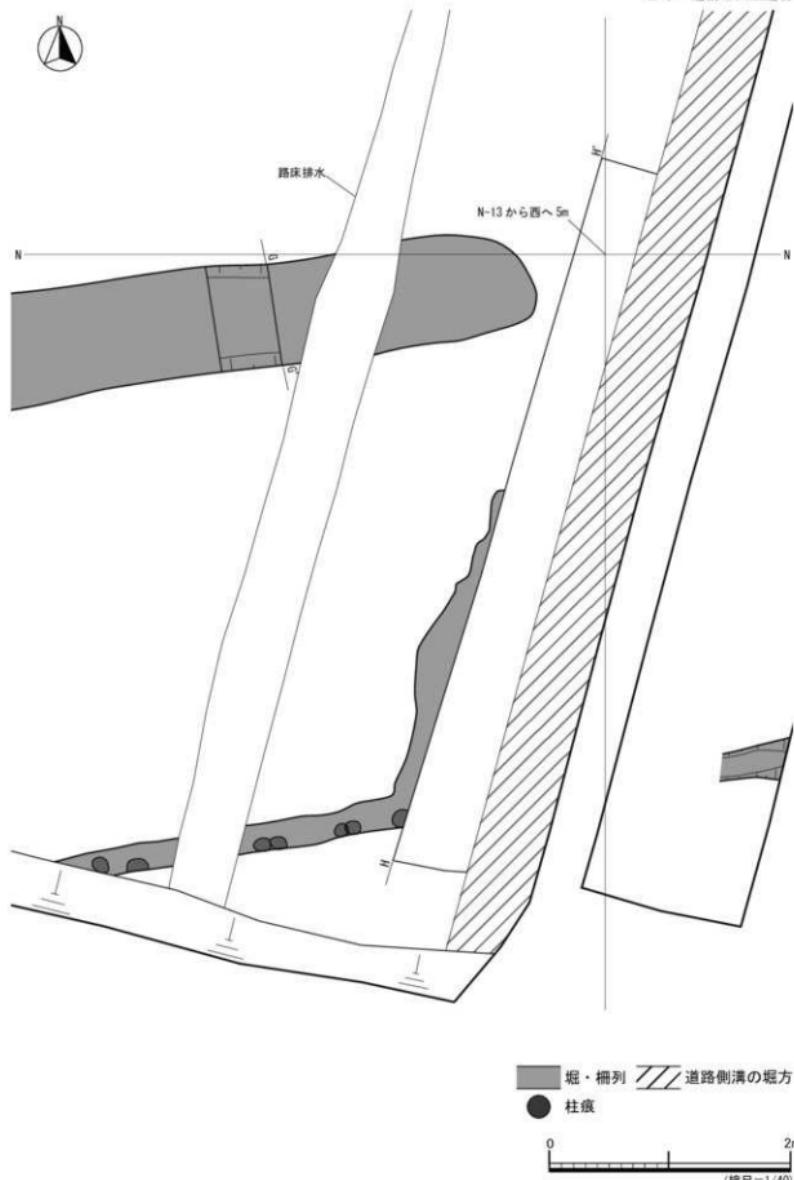
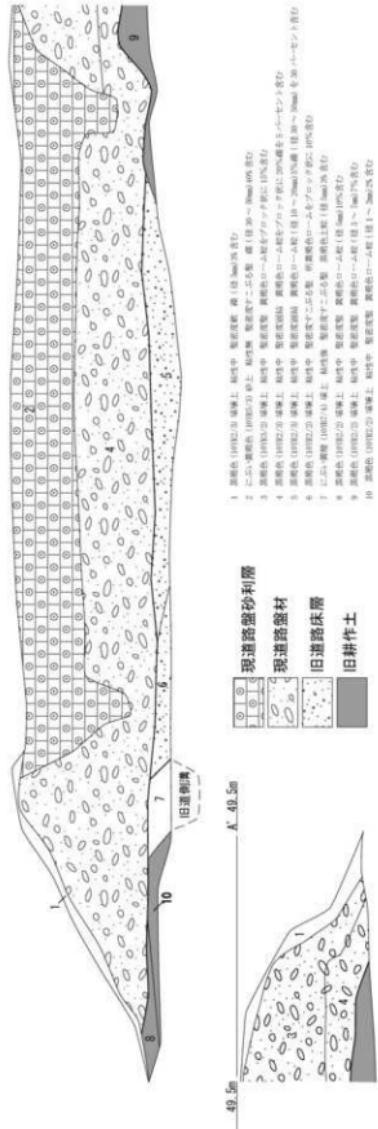


図 19 2-1 調査区堤分岐部分拡大





38

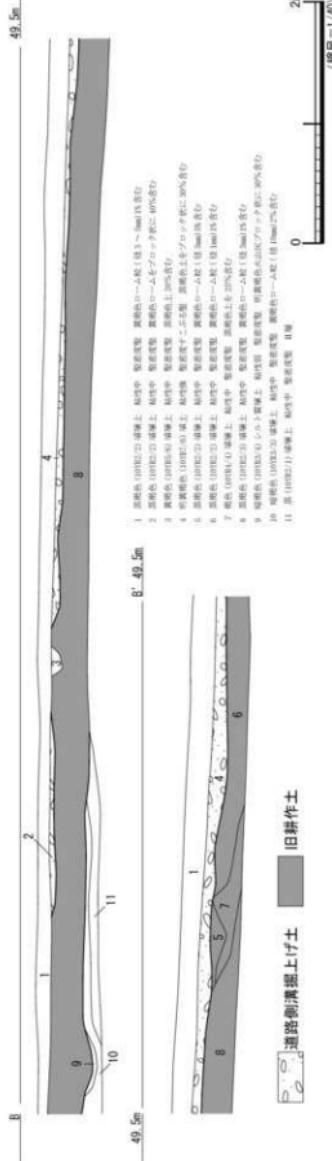


図21 調査区北壁及び西壁断面

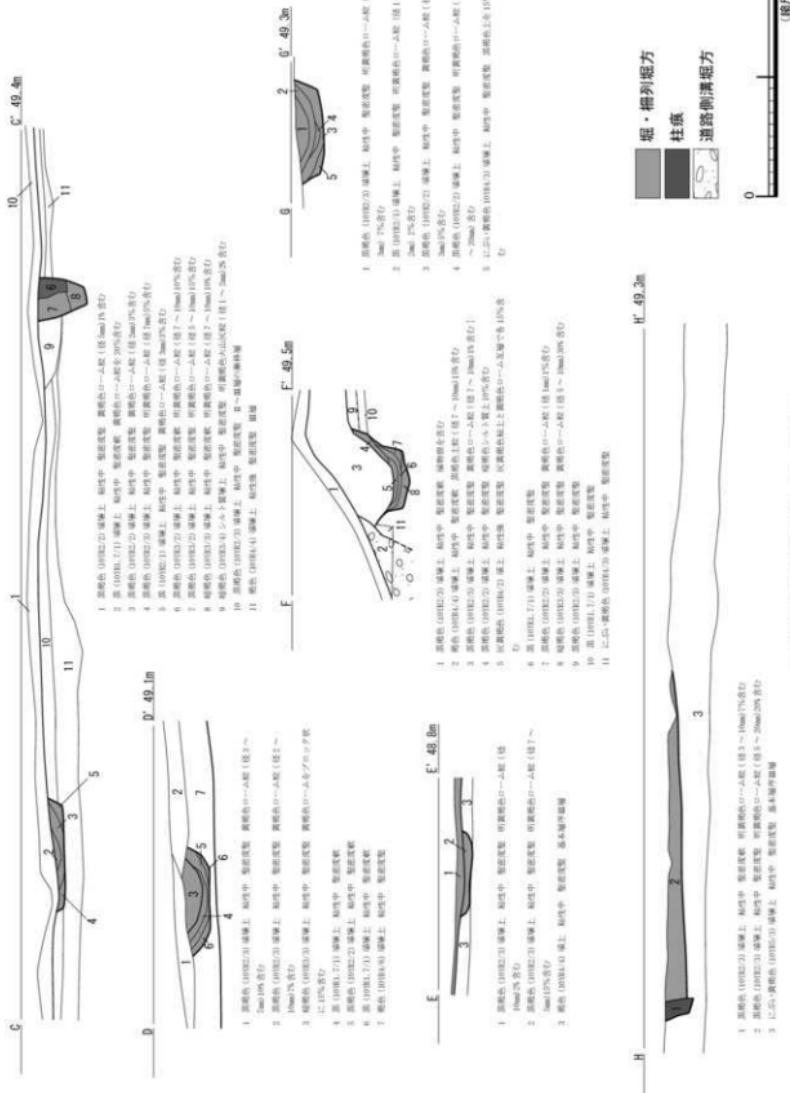


図 22-2-1 調査区東壁・掘・柵断面

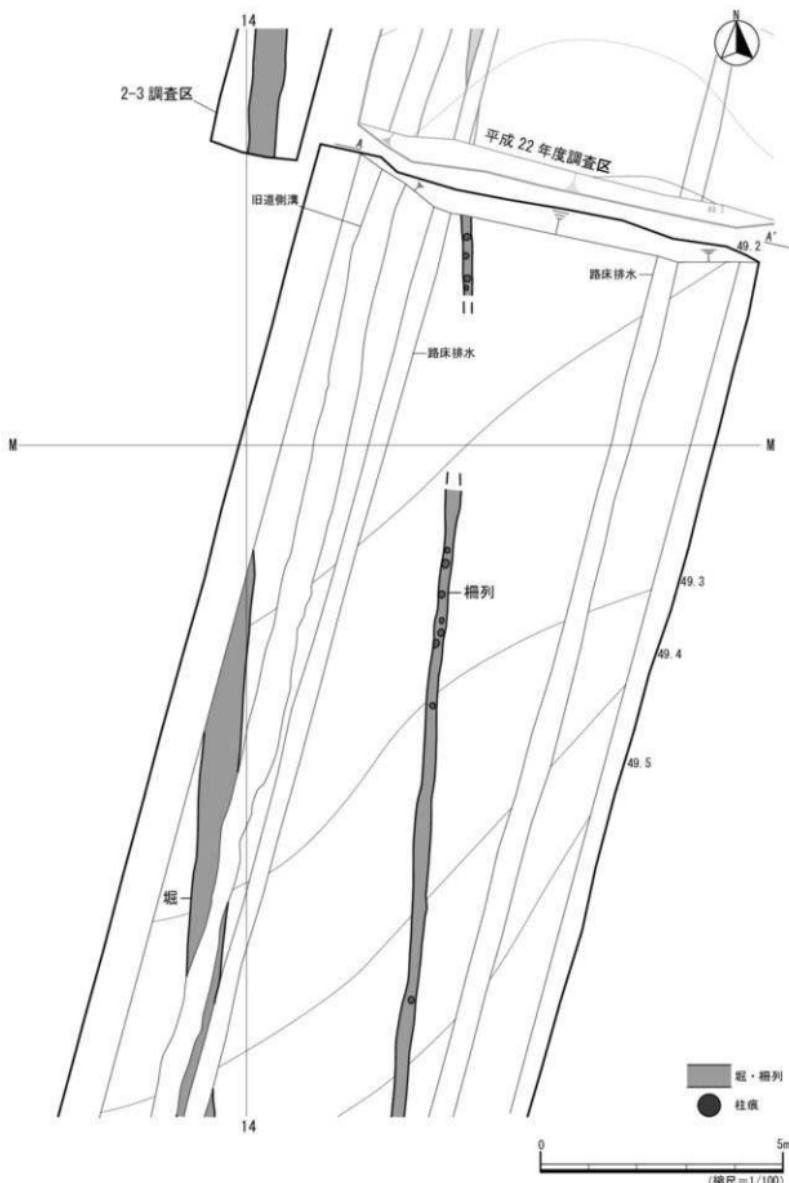


図 23 2-2 調査区平面図 (1)

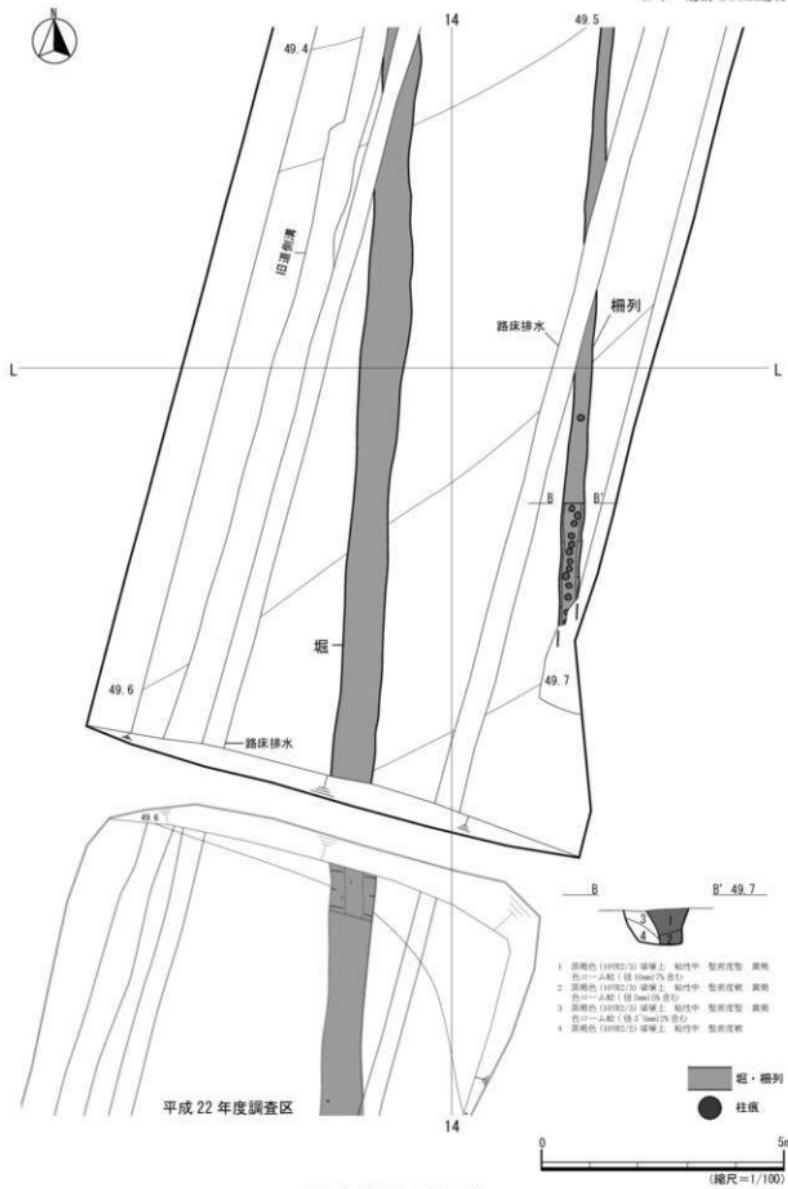


図 2-2 調査区平面図 (2)

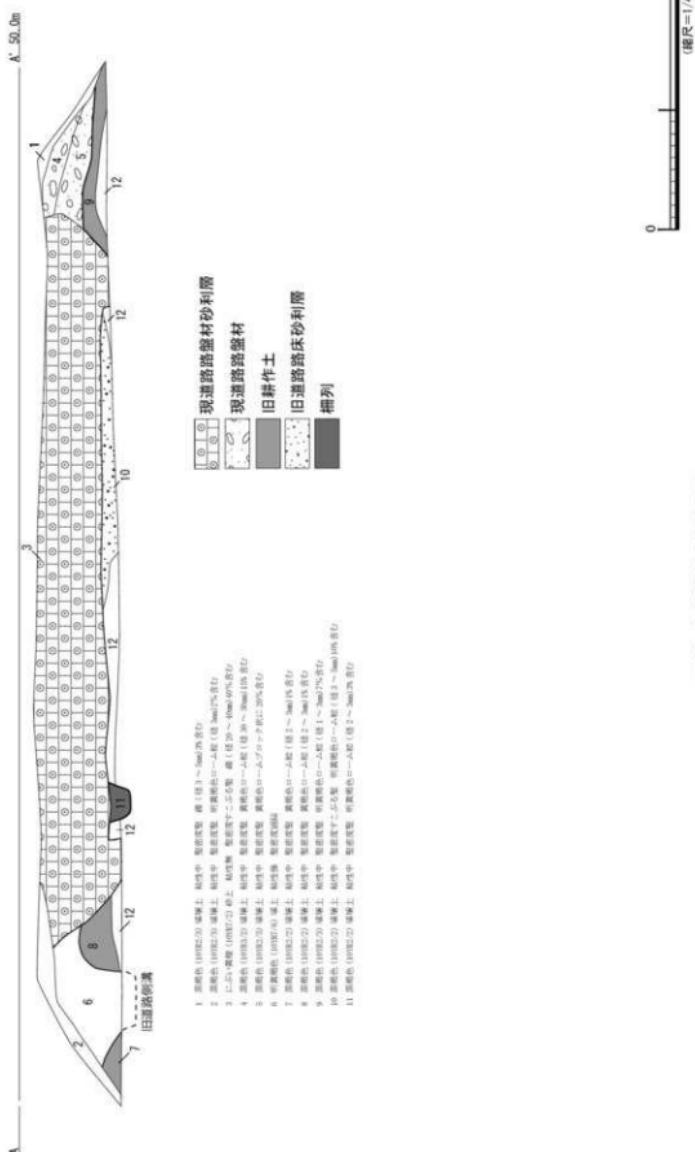


圖 25 2-2 調查區北壁斷面

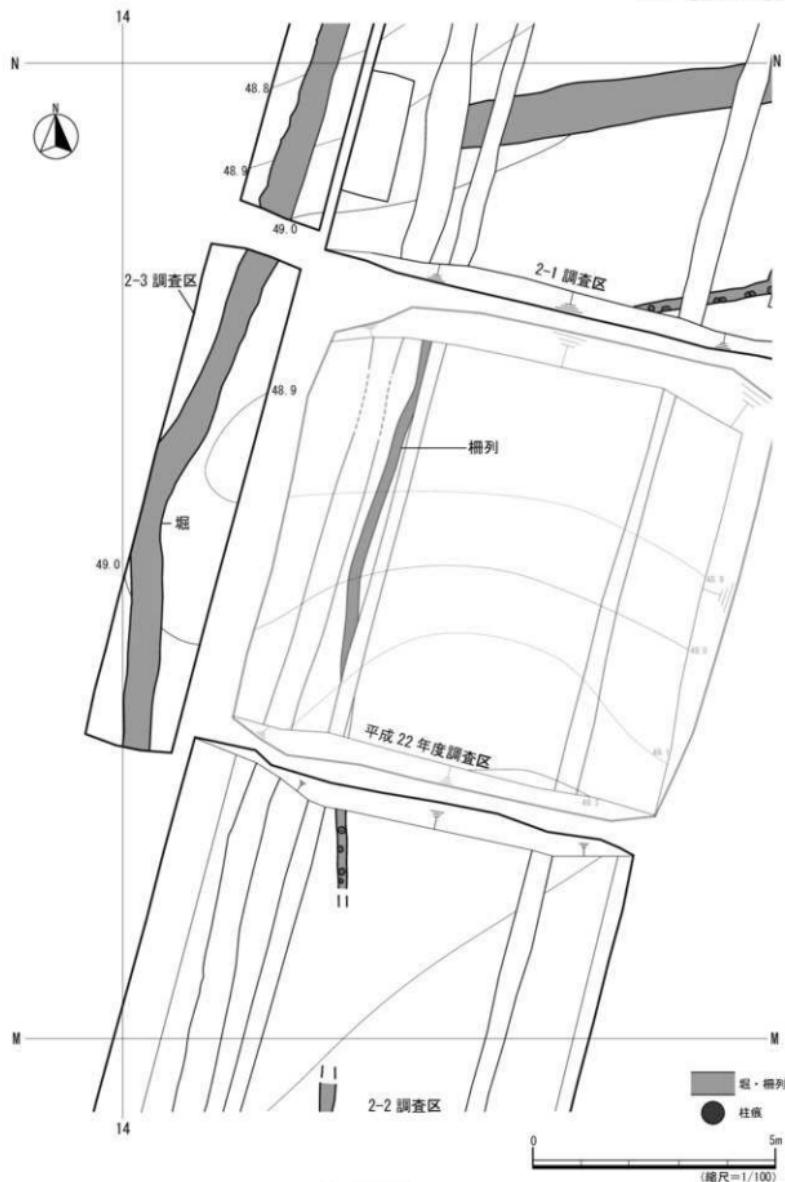


図 26 2-3 調査区平面図

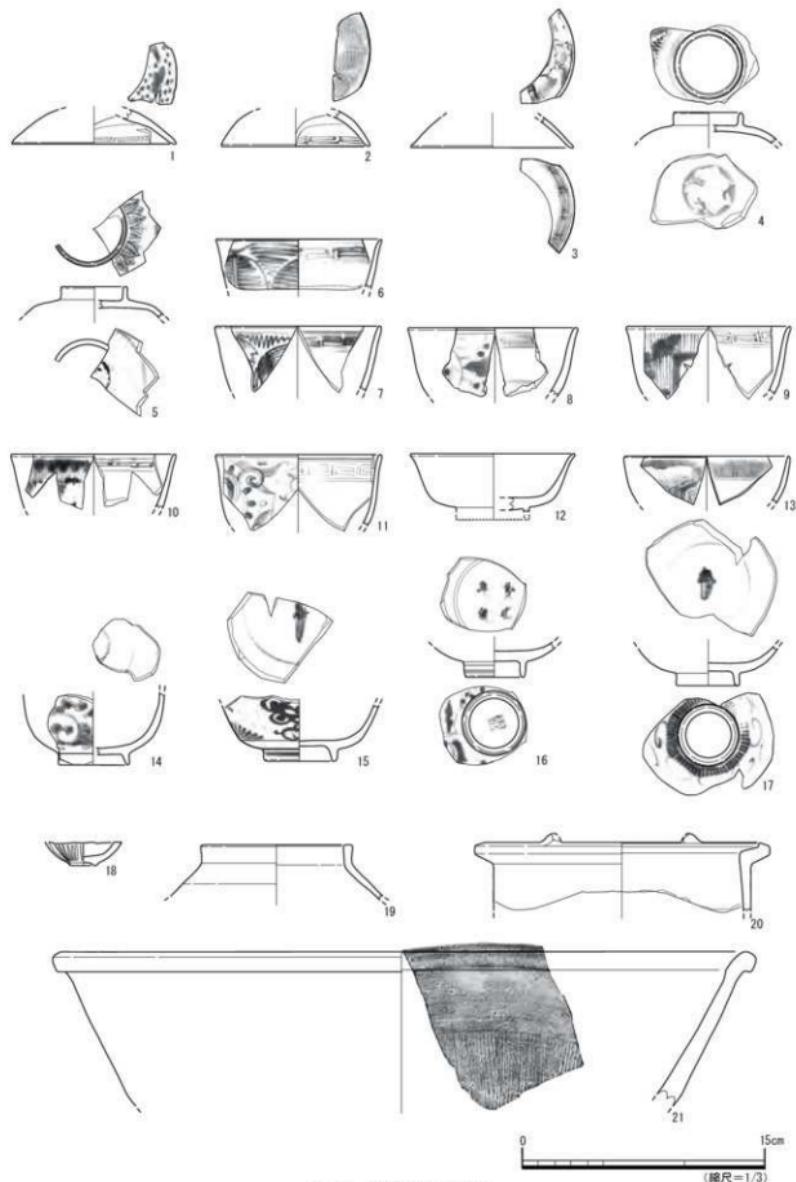


図 27 調査区出土遺物

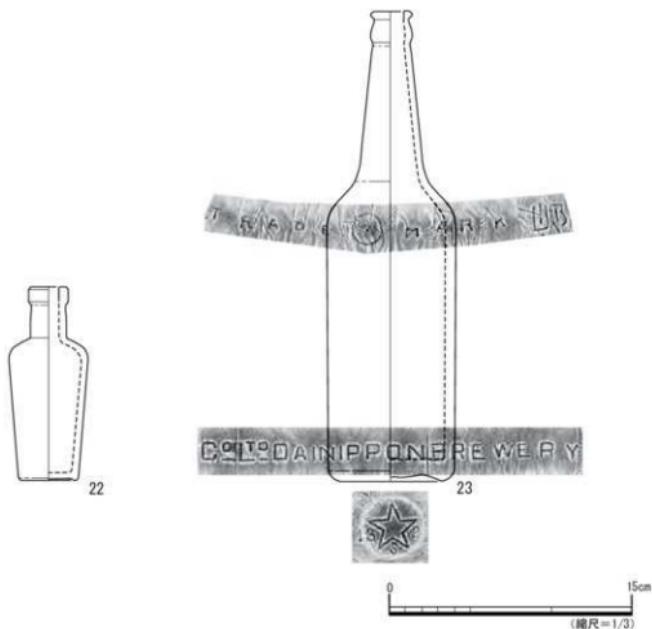


図28 堀出土遺物

表4 掘載遺物一覧(陶磁器・ガラス製品)

掲載番号	写真	調査区	層位	種類	産地	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
1	23	1-1	I	磁器	瀬戸	碗蓋	10.0			外面草花文と蝶、内面雷文
2	23	1-1	I	磁器	瀬戸	碗蓋	10.0			外面草葉文、内面雷文
3	23	1-1	I	磁器	瀬戸	碗蓋	10.0			外面松竹梅、内面雷文
4	23	1-1	I	磁器	肥前	碗蓋		3.7		外面花文と波、内面見込みに松竹梅文
5	23	1-1	I	磁器	肥前	碗蓋		4.2		外面連弁、高台に櫛齒文、見込み圓線の内側に松竹梅文
6	23	1-1	I	磁器	瀬戸	碗	10.0			外面草葉文、内面雷文
7	23	1-1	表採	磁器	瀬戸	碗	10.0			外面花文と波、内面雷文
8	23	1-1	I	磁器	肥前	碗	10.0			外面草花文、内面雷文
9	23	1-1	I	磁器	肥前	碗	10.0			外面縦縞に花文と窓、内面雷文
10	23	1-1	I、表採	磁器	瀬戸	碗	10.0			外面花文、内面雷文
11	23	1-1	I	磁器	肥前	碗	10.0			外面草花文と窓、内面雷文
12	23	2-2	I	磁器	瀬戸	碗	10.0			
13	23	1-1	I	磁器	瀬戸	丸碗	10.0			外面松葉と亀甲内に花文、内面雷文
14	23	1-1	I	磁器	瀬戸	碗		4.3		外面草花文、内面見込み圓線の内側に松竹梅文
15	23	2-1	I	磁器	瀬戸	碗		4.2		外面松葉と花文、内面見込みに「寿」字
16	23	1-1	I	磁器	瀬戸	碗		3.6		外面草花文、高台内に落款風の「青」?字、内面見込みに「成化年製」字
17	23	1-1	I	磁器	瀬戸	碗		3.6		外面縦縞と唐草文、内面見込みに「寿」字
18	23	1-1	I	磁器	瀬戸	紅皿	4.8	1.4	1.3	
19	23	1-1	I	陶器	不明	土瓶	9.0			
20	24	1-1	I	陶器	不明	鍋	15.8			
21	24	1-1	I	陶器	肥前	すり鉢		41.8		
22	25	2-3	壺	ガラス	不明	瓶	2.4	3.5	9.7	
23	26	2-3	壺	ガラス	不明	ビール瓶	2.5	7.5	26.7	肩部に「TRADE MARK」の陽刻、体部下段に「DAINIPPONBREWERY CoLTD」の陽刻

表5 平成23年度出土遺物集計表

種別	器種	産地	法量	点数
磁器				104
	碗蓋			13
		瀬戸		12
		肥前		1
	碗			59
		瀬戸		47
		10cm		17
		不明		30
		肥前		8
		10cm		6
		不明		2
		不明		4
	丸碗	10cm		9
	皿	肥前		6
	輪花皿			12
	瓶			4
		波佐見		3
		肥前		1
	紅皿			1
陶器				58
	土瓶			34
	灯明皿			3
	瓶	越後		9
	行平鍋			2
	鍋			2
	不明			4
	すり鉢	肥前		1
	甕	瀬戸		3
土製品				4
	火鉢			4
金属製品				5
	鎌			1
	鍋			1
	銭			3
近代陶器				10
	碗			8
	皿			1
	型押皿			1
ガラス製品				9
	ビール瓶			2
	瓶			7
石器				2
	石核			1
	フレイク			1
総計				192



# V章 自然科学的分析

## 1. 館城跡から検出されたテフラ層

藤根 久 (パレオ・ラボ)

### (1) はじめに

館城跡のトレンチ調査では、軽石質のテフラ層が検出された。ここでは、この軽石質テフラ層について、鉱物組成、火山ガラスの形態および軽石ガラスの屈折率測定を行い、テフラの同定を行った。

### (2) 試料と方法

分析試料は、1-1調査区低地部トレンチおよび1-3調査区中央トレンチにおいて採取された軽石質テフラ層2点である（表1）。

表1 テフラ試料とその特徴

分析No.	位置	層位	色調	所見	特徴
1	1-1調査区低地部トレンチ	5層	黒褐色 (2.573/2) 軽石混じり有機質粘土	二次堆積層か	灰白色軽石 (最大径1mm)
2	1-3調査区中央トレンチ	18層	暗灰黄色 (2.574/2) 軽石質テフラ	一次堆積層	灰白色軽石 (最大径1mm)

各テフラ試料は、以下の方法で処理した。

①1-1調査区低地部トレンチ5層から検出されたテフラ層9.5g、1-3調査区中央トレンチ18層から検出されたテフラ層22.3gを自然含水状態で秤量した。②1φ (0.5mm)、2φ (0.25mm)、3φ (0.125mm)、4φ (0.063mm) の4枚の篩を重ね、湿式ふるい分けをし、各残渣の重量を量った。③4φ篩残渣について、簡易プレパラートを作製し、火山ガラスの形態分類を行った。火山ガラスの形態は、町田・新井（2003）の分類基準に従い、バブル型平板状（b1）、バブル型Y字状（b2）、軽石型繊維状（p1）、軽石型スポンジ状（p2）、急冷破碎型フレーク状（e0）に分類した。また、鉱物は、長石（Pl）、斜方輝石（Opx）、単斜輝石（Cpx）、角閃石（Ho）、磁鐵鉱（Mg）について同定・計数した。④4φ篩残渣の火山ガラスは、温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率測定を行った。

### (3) 結果

以下に、各テフラの特徴について述べる。

#### [分析No.1 (1-1調査区低地部トレンチ5層)]

湿式篩分けを行った結果、3φ篩残渣が最も多く51.37%、次いで4φ篩残渣が23.93%、2φ篩残渣が22.54%であった。

4φ篩残渣のプレパラートの偏光顕微鏡観察では、火山ガラスが全体の51.87%、長石（Pl）が30.17%、斜方輝石（Opx）が4.74%、単斜輝石（Cpx）が2.00%、角閃石（Ho）が0.25%、磁鐵鉱（Mg）が2.99%であった。

火山ガラスは、軽石型スポンジ状（p2）が36.66%と最も多く含まれ、バブル型平板状ガラス（b2）が1.25%、バブル型Y字状ガラス（b2）が6.48%、軽石型繊維状（p1）が6.98%、急冷破碎型フレーク状（e0）が50.50%であった。

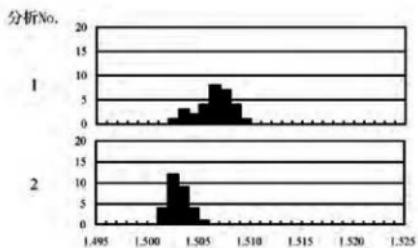
火山ガラス30粒について屈折率測定を行った結果、範囲（range）が1.5028–1.5093の比較的広い範囲に分布し、平均値が1.5065であった。

表2 テフラ試料の湿式篩分け結果

分析No.	満潤重量 (g)	砂粒分の粒度組成(重量g)				砂粒分の粒度組成(4φ以上に対する重量%)			
		1φ	2φ	3φ	4φ	1φ	2φ	3φ	4φ
1	9.50	0.0399	0.4186	0.9539	0.4444	2.15	22.54	51.37	23.93
2	22.30	0.0878	1.1160	3.0354	1.7340	1.47	18.68	50.82	29.03

表3 4φ篩残渣中の軽鉱物組成(上段:個数、下段:個量%)

分析No.	長石 (P1)	不明	バブル(Y型)		軽石型		角閃石型		ガラス 合計	斜方輝石 (Opx)	単斜輝石 (Cpx)	角閃石 (Bn)	磁鐵鉄 (Mg)	合計
			平板状 (b1)	Y字状 (b2)	纖維状 (p1)	スponジ状 (p2)	フレーク状 (p3)	ガラス 合計						
1	123	32	5	26	28	147	2	208	19	8	1	12	401	
	30.17	7.98	1.23	6.48	6.98	36.66	0.30	81.87	4.74	2.00	0.25	2.99	100.00	
2	123	19	0	9	8	221	0	228	19	3	0	10	403	
	30.02	4.71	0.00	2.23	1.99	54.94	0.00	59.06	2.48	0.74	0.00	2.48	100.00	



範囲 (range)	平均 (mean)	計数
1.5028 ~ 1.5093	1.5065	30
1.5015 ~ 1.5051	1.5031	30

図1 4φ篩残渣中の火山ガラスの屈折率測定結果

## [分析No. 2 (1-3調査区中央トレンチ18層)]

湿式篩分けを行った結果、3φ篩残渣が最も多く50.82%、次いで4φ篩残渣が29.03%、2φ篩残渣が18.68%であった。

4φ篩残渣のプレバラートの偏光顕微鏡観察では、火山ガラスが全体の59.06%、長石(P1)が30.52%、斜方輝石(Opx)が5.48%、単斜輝石(Cpx)が0.74%、磁鐵鉄(Mg)が2.48%であった。

火山ガラスは、軽石型スponジ状(p2)が54.84%と最も多く含まれ、バブル型Y字状ガラス(b2)が2.23%、軽石型纖維状(p1)が1.99%であった。

火山ガラス30粒について屈折率測定を行った結果、範囲(range)が1.5015~1.5051の比較的狭い範囲に集中し、平均値が1.5031であった。

## (4) 考察

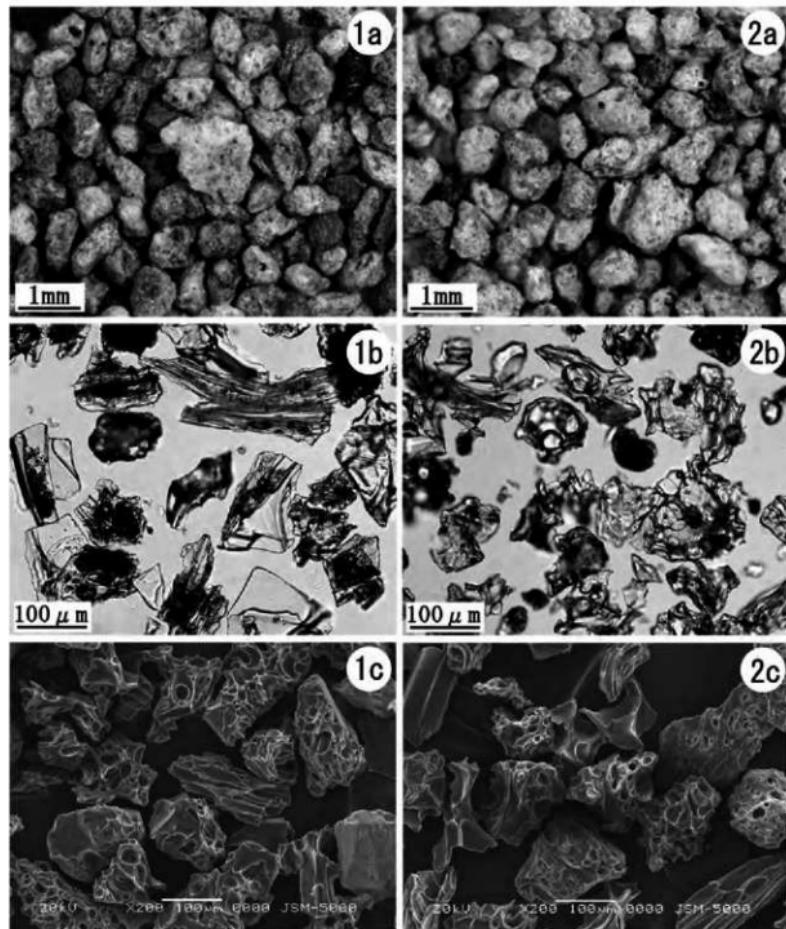
分析No. 1 (1-1調査区低地部トレンチ5層)の軽石質テフラは、軽石型ガラスが特徴的に多く、バブル型Y字状ガラス(b2)も含まれ、火山ガラス屈折率の範囲(range)が1.5028~1.5093の比較的広い範囲に分布し、平均値が1.5065であった。こうした特徴を示す軽石質テフラは、AD1640年に駒ヶ岳火山から噴出した駒ヶ岳dテフラ(Ko-d)である。この駒ヶ岳dテフラ(Ko-d)は、降下火山灰(afa)、降下軽石(pfa)、火碎流堆積物(pfl)からなる噴火に伴う軽石質テフラであり、降下テフラの分布は、北西方向に

150kmに及ぶ（町田・新井, 2003）。

一方、分析No.2（1-3調査区中央トレーナー18層）の軽石質テフラは、軽石型ガラスが圧倒的に多く、火山ガラス屈折率の範囲（range）が1.5015-1.5051の比較的狭い範囲に集中し、平均値が1.5031であった。こうした特徴を示す軽石質テフラは、AD1694年に駒ヶ岳火山から噴出した駒ヶ岳c2テフラ（Ko-c2）である。この駒ヶ岳c2テフラ（Ko-c2）は、降下軽石（pfa）と火碎流堆積物（pfl）からなる噴火に伴う軽石質テフラであり、降下テフラの分布は、東北東方向に350kmに及ぶ（町田・新井, 2003）。

#### 引用文献

町田 洋・新井房夫（2003）新編 火山灰アトラス、336p、東京大学出版会。



図版1 各テフラ層中の粒子顕微鏡写真

1a. 分析No. 1 (1φ 篩残渣の実体顕微鏡写真) 2a. 分析No. 2 (1φ 篩残渣の実体顕微鏡写真)

1b. 分析No. 1 (4φ 篩残渣の偏光顕微鏡写真) 2b. 分析No. 2 (4φ 篩残渣の偏光顕微鏡写真)

1c. 分析No. 1 (4φ 篩残渣の電子顕微鏡写真) 2c. 分析No. 2 (4φ 篩残渣の電子顕微鏡写真)

図1 4φ 篩残渣中の火山ガラスの屈折率測定結果

## 2. 館城跡の花粉分析

森 将志 (パレオ・ラボ)

### (1) はじめに

北海道檜山郡厚沢部町に所在する館城跡において自然の沢状地形が検出され、沢状地形に設定されたトレチから花粉分析用の土壤試料が採取された。以下では、この試料を用いて行った花粉分析の結果について記し、遺跡周辺の古植生を検討した。

### (2) 試料と分析方法

1-1調査区低地部トレチ断面は1~7層に区分されている。上位から1,2層が昭和30~50年代と思われる農地造成に伴う人为的埋め戻し層、3層は自然堆積層、4層は近代磁器を含む焼土層、5~7層は館城築城期を含み明治・大正期までに堆積した自然堆積層である。なお、5層では二次堆積が疑われる火山灰が検出されており、駒ヶ岳dテフラ (Ko-d : AD1640) と同定されている (テフラの報告参照)。これらのうち、花粉分析用の試料は3層 (試料No. 1) と5層 (試料No. 2) から採取された。試料No. 1, 2は、いずれも黒色 (10YR1.7/1) 粘土である。この2試料について、以下の手順に従って花粉分析を行った。

試料 (湿重約3~4g) を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%のフッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離 (比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離) を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトトリシス処理 (無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え20分間湯煎) を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行った。各プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本を作製し、図版に載せた。図版に載せた分類群ごとの単体標本 (PLC. 478~483) は、パレオ・ラボに保管されている。

### (3) 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉21、草本花粉17、形態分類を含むシダ植物胞子4の総計42である。これらの花粉・胞子の一覧表を表1に、分布図を図1に示した。なお分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基準とした百分率で示してある。また図や表においてハイフン (-) で結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものと示している。クワ科やマメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に括して入れてある。

検鏡の結果、試料No. 2 (5層) ではヤナギ属やハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキ属、トネリコ属などの落葉広葉樹が多く産出しており、産出率はそれぞれ15%、18%、12%、18%、8%となる。草本花粉の産出割合は低いが、イネ科とヨモギ属が9%、ミツガシワ属がわずかに産出している。

試料No. 1 (3層) ではヤナギ属やハンノキ属、トチノキ属、トネリコ属などの産出率がNo. 2よりも減少しており、それぞれ0%、10%、9%、2%となる。一方、マツ属複維管束亜属やスギ属、コナラ属コナラ亜属などはNo. 2よりも産出が多くなり、それぞれ11%、9%、22%の産出率を示す。また、No. 2では草本花粉の産出割合が高くなり、イネ科とカヤツリグサ科、ヨモギ属がそれぞれ24%、10%、7%の産出率を示す。さらに、栽培植物のソバ属がわずかに産出している。

### (4) 考察

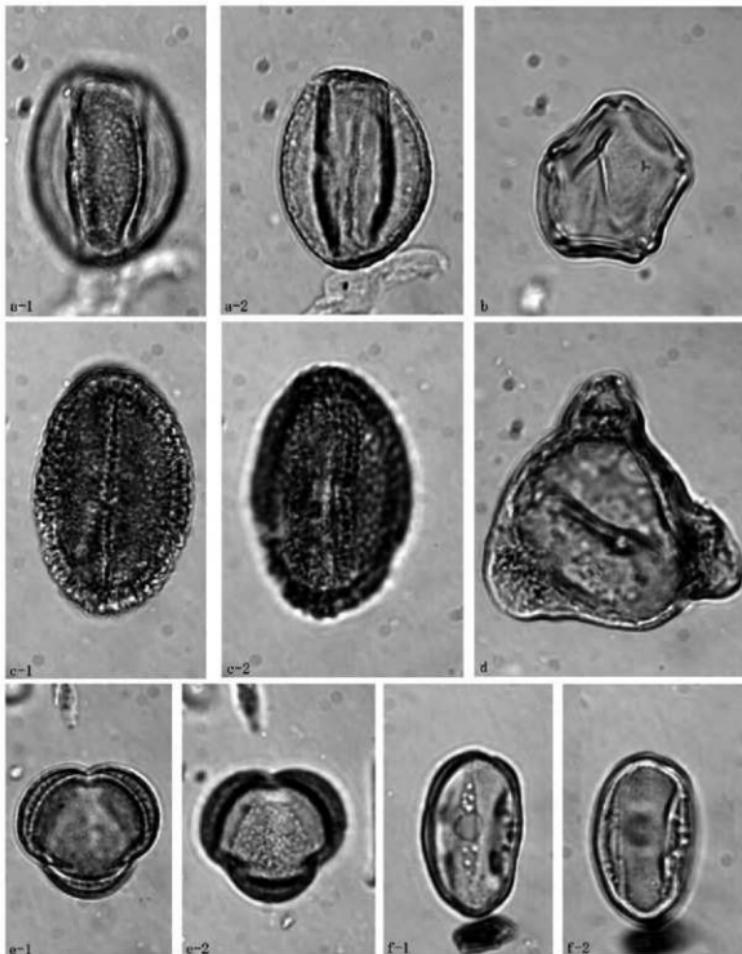
試料No. 2 (5層) の堆積時期は、館城築城期を含み明治・大正期までと推定されている。試料No. 2で

は湿地林要素のハンノキ属やトネリコ属、河川周辺に生育するヤナギ属やトチノキ属などの分類群が多く産出するため、沢状地形近くにヤナギ属やハンノキ属、トネリコ属などの湿地林や河畔林が存在し、その周辺にトチノキ属が生育していたと推測される。こうした湿地的環境の一部にミツガシワ属が生育していたであろう。また、館城跡周辺の丘陵部ではコナラ属コナラ亜属やカバノキ属、ブナ属、サワグルミ属-クルミ属、ニレ属-ケヤキ属などが分布を広げていたと思われる。試料No. 2における草本花粉の産出が少ないため、館城跡周辺では草地の分布範囲が狭かったと思われるが、イネ科やヨモギ属などの雑草が生育していたと考えられる。

試料No. 1（3層）の堆積時期は明治・大正期以降、昭和30～50年代以前と推定されている。試料No. 1では、好湿性のヤナギ属やハンノキ属、トチノキ属、トネリコ属などがNo. 2に比べると減少しており、二次林要素のマツ属複雜管束亜属やコナラ属コナラ亜属、カバノキ属などの増加が見られる。さらに、草本花粉の産出割合が高くなっているため、館城跡周辺では開けた二次林が広がっていたと思われる。すなわち、それまで成立していた植生が築城に伴い切り開かれ、草地が広がり、低地や沢沿いを中心には分布していたハンノキ属やトネリコ属、ヤナギ属、トチノキ属などに代わって、ニヨウマツ類やカバノキ属、コナラ属コナラ亜属などの陽樹が分布を広げていったと思われる。草本類としてはイネ科やヨモギ属などの雑草群落が館城跡周辺に形成されていたと考えられる。なお、試料No. 1からはソバ属が検出されており、明治・大正期以降、昭和30～50年代以前には、沢状地形の周辺においてソバが栽培されていた可能性が考えられる。



図1 館城跡における花粉ダイアグラム



図版 館城跡（試料No.1）から産出した花粉化石

- a. コナラ属コナラ亜属 (PLC. 478)
- b. ハンノキ属 (PLC. 479)
- c. ソバ属 (PLC. 480)
- d. ミズタソウ属-マツヨイグサ属 (PLC. 481)
- e. ヨモギ属 (PLC. 482)
- f. トチノキ属 (PLC. 483)

0.02mm

# VI章 調査のまとめ

## 1. 館城北側の状況－第1調査区の成果－

### (1) 遺構・遺物の検出状況から考える流路跡北側の区域の性格

第1調査区は流路跡の北側に位置し、これまで漠然と外郭線の外側と考えられてきた地域である。そのため、これまで調査対象区域とはなってこなかった。平成21～22年度の調査では、流路跡が外郭線を構成していた可能性を検証するために、流路跡南側に調査区を設定したが、外郭線と関わる遺構は検出できなかった。北側の外郭線については、流路跡、すなわち自然の沢状地形を利用した可能性があるものの、これを実証することは現在のところできない。このため、流路跡北側の区域で遺構確認を行い、この区域の性格を判断する目的で第1調査区を設定している。

1-1～1-3調査区のいずれにおいても遺構は検出されていない。出土遺物は、1-2調査区で2点、1-3調査区では出土していない。遺構検出状況、遺物出土状況の結果から、1-2調査区、1-3調査区は館城跡に関わる施設が設置されていた可能性は低い。

1-1調査区では沢状地形を中心に約180点の遺物が出土した。図9に示した遺物分布からは、沢状地形以外の平坦部でも一定量の遺物が分布することから、沢状地形出土の遺物は、平坦部で使用・廃棄されたものである可能性が考えられる。したがって、1-1調査区周辺では館城跡に関わる何らかの施設が設置され、陶器等が使用される環境にあったことが考えられる。1-1調査区周辺が館城跡郭内に位置するのか、郭外に位置するのかは現在のところ明確にし得ないが、流路北側の区域においても館城跡と関連する施設が存在した可能性が指摘できる。

### (2) 1-1調査区沢状地形の埋没過程について

以下のプロセスで沢状地形の埋没が進行したものと考える。

- ①河川の開析作用により沢状地形の形成が進む
- ②開析作用が弱まり、土砂流入により沢状地形の埋没が進む（1640年以降）③焼土の廃棄④沢状地形の埋没の進行
- ⑤暗渠の埋設（昭和50年代頃）
- ⑥農地造成に伴う沢状地形の埋め立て

②の土砂流入による沢状地形の埋没は、図11B-B' 土層5に含まれる火山灰がKo-d（1640年降灰）と同定されており（V章第1節参照）、また、この火山灰が二次堆積によるものと判断されることから、Ko-d降灰年代である1640年以降に埋没が進行したと判断する。沢状地形の埋没は、③の焼土の廃棄というイベントを進行する。焼土の廃棄年代は不明だが、焼土層をはさんだ土層3と土層5の花粉分析の結果、土層3では樹木花粉が多く検出され、土層5では草本類が相対的に多く検出されていることから（V章第2節参照）、焼土層を挟んで何らかの環境変化があったことが考えられる。花粉分析の報告者は、これらの環境変化について館城築城に伴う樹木の伐採をその一因として推測している。

⑤の暗渠の埋設は、土管製の暗渠管が一般的となる昭和50年代頃と推測する。⑥の農地造成に伴う沢状地形の埋め立て年代ははっきりとはわからないが、流路を挟んで南側の地権者だった山岸富三郎氏（字城丘在住68歳）の記憶によると、昭和50年代に付近の農地造成を行ったことがあり、沢状地形の北側もその頃に農地造成が行われ、沢状地形の埋め立てが行われたのではないかと述べている。沢状地形の埋め立てと同時に暗渠も埋め立てられている。

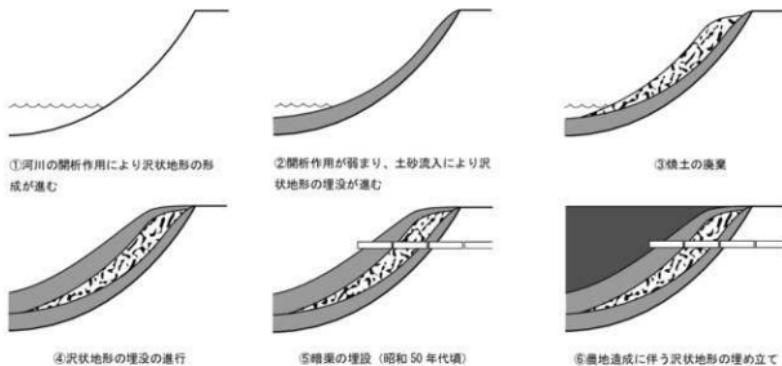


図29 1-1 調査区沢状地形埋没過程

## 2. 史跡外西側の堀・柵列—第2調査区の成果—

平成22年度の調査により堀が町道敷地内で屈曲し北へのびることが確認された（H22・2-3調査区）。さらにその北側の調査区（H22・2-2調査区）では柵列と考えられる溝状遺構を検出していたが、柱痕が検出されなかつたこと、柵列平面のラインが曲線的に湾曲することがこれまで検出された柵列の様相と異なることから、平成22年度時点では、これを柵列と断定することができなかつた。最も北側の調査区では堀・柵列ともに検出できず、「低湿地帯の手前（南）で堀・柵列の構築を止めた可能性も考えられる」（厚沢部町教育委員会2011）との見解を示していた。

平成23年度の調査により、2-2調査区ではH22・2-3調査区の延長上で堀を検出し、さらにその東側4.2m（真芯距離）で柵列を検出した。堀・柵列とともに北へのび、柵列は2-2調査区北端でH22・2-2調査区で検出した「溝状遺構」と接続する。

堀は、調査区外西へのび、H22・2-2調査区西側に設置した2-3調査区でこの延長を検出した。H22・2-2調査区で検出した「溝状遺構」と同様、堀も曲線的に湾曲しており、真芯距離でおよそ4mとなり、これまで確認されている堀と柵列との間隔にはほぼ等しい。以上のことから、H22・2-2調査区で検出した「溝状遺構」については、柵列と判断したい。

2-1調査区では、2-3調査区からの延長方向のまま北へのびる堀と、東へのびる堀に分岐する。2-2調査区南東部には、東へのびる堀に並行する柵列がある。北へのびる堀は、道路側溝の堀方によって搅乱されており、その延長は確認できないが、H22・2-1調査区まではのびていない。また、この堀には柵列が伴わない。北へのびる堀は、外郭線として完結しておらず、柵列も伴わないことから、分岐して東へのびる堀・柵列が館城跡本来の外郭線として機能したと考える。

## 3. 自然科学的分析の結果について

### （1）火山灰同定

これまで館城跡では確認されていないKo-d火山灰が検出された。同定した試料は降灰後の自然堆積ではなく、二次的に移動し、沢状地形に流入したものである。

これまで館城跡で確認されている火山灰は、B-tm（10世紀）、Ko-c2（1694）である。ただし、平成17年度調査の際に実施した火山灰同定の報告では、屈折率のデータ比較により「最頻値はKo-c2（1694）のものに最も近い」としながらも、「Ko-d（1640）の可能性も考えられる」との所見が示されている（加藤2007）。

## （2）花粉分析

これまでの館城跡の花粉分析では、館城跡築城期を含むと推測される土層を中心に試料採取し、分析を行ってきた。その結果、館城跡周辺では大きく分けて2種類の植生環境が確認されている。

一つは、コナラ属、ハンノキ属、サワグルミ属、ニレ属、ブナ属、トチノキ属などの樹木花粉が優先し、特にコナラ属が優先する環境である。コナラ属やブナ属などは、館城跡南の丘陵地帯を中心に分布したと考えられ、現植生とも一致する。ハンノキ属、サワグルミ属、ニレ属、トチノキ属などは、沢筋の湿润な環境を好む樹種であり、館城跡周辺の平坦部に分布していたと考えられる。館城跡は、中央を自然の流路が南東から北西に流れ、また、現在は埋め立てられた沢状地形があったことも知られており、全体的に地下水位が高く湿润な環境である。館城跡とその周辺の平坦地や沢状地形周辺には、現在でもハルニレやハンノキが生育しており、ハンノキ属をはじめとした湿润な環境を好む樹種は、館城跡周辺の平坦部に分布していたと考える。

もう一つは、樹木花粉では、カバノキ属が優先し、さらにイネ科草本花粉が多く検出される試料がある。「館城構築に伴う空き地の広がりとそこへのカバノキ属の侵入の可能性」が指摘されている（鈴木2008）。館城築城に伴いそれまで生育していた広葉樹が切り開かれた結果、バイオニア植物であるカバノキ属が侵入した状況が推測できる。

1-1調査区沢状地形では、焼土層をはさんで上下の層で採取した土壤による花粉分析の結果、下層（土層5）では、落葉広葉樹花粉が多く産出し、ハンノキ属、トチノキ属、ヤナギ属、コナラ属、トネリコ属の順の産出割合となっている。上位の3種は湿地を好む樹種であり、湿地林や河畔林として生育することの多い樹種が優先する傾向は、本調査区の地形的特徴とよく合致する。上層（土層3）では土層5で上位を占めていたハンノキ属、トチノキ属、ヤナギ属などの産出割合が減少し、マツ属副維管束亞属、スギ属、コナラ属の産出割合が増加する。また、草本花粉の産出割合が高まり、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が上位を占める。これまでの花粉分析結果を考慮すると、焼土を挟んだ下層の花粉の産出状況は、比較的自然状態に近い植生を示し、上層の花粉の出現状況は、湿地性の樹木が抜開され、草本類が優先する環境へ変化したことが読み取れる。

上下層における植生の変化は、館城築城に伴う樹木の大量伐採の可能性も考えられるが、館城南側の丘陵地帯を中心に生育するコナラ属の産出割合に大きな変化がみられず、湿地性の樹木のみが大幅に減少していることから、平野部における農地開発の可能性が考えられる。また、南北海道に生育する副維管束亞属はクロマツとアカマツがあるが、いずれも近代以降の植林による移入種と考えられる。スギ属も同様に近代以降の移入種である。

以上のことから、上下層における植生の変化は、館城築城に伴う環境変化の可能性も否定できないが、近代以降の農地開発の影響を反映した可能性が高いと考える。

## 4. 館城跡外郭線調査にかかる今後の課題

北辺の外郭線については、北東部を除き、まったく手がかりが得られていない。流路跡が外郭線として機能していた可能性を推測できるが、それを示す証拠は得られていない。

西側の外郭線については、町道上館城ノ岱線道路敷地内を北へのび、さらに東へ屈曲することを確認した。この延長の確認が今後の最重要課題となる。

また、流路跡が外郭線として機能していた可能性があることから、流路跡の評価が重要となる。流路跡は館城跡南側の丘陵に源を発し、丘陵裾野で南東部の堀・土塁に切られている。館城跡南東部について「いわゆる百間堀はから堀であったが、この東南隅だけは水をためていた。丸山のすそを流れる小流があつて城地を貫流し、与惣吉沢に落ちていた地形を利用して、ここに堀を深く掘り水溜めのものとし、この水を引き郭内の庭園に噴水させた施設」があったとされ（『厚沢部町史－桜島一』（第1巻））、南東部の堀については、自然の沢を郭内に利用するための特別な工夫がなされていたことを伺わせる記述がある。外郭線調査の一環として、南東部における流路と堀・土塁との関係の確認が必要である。

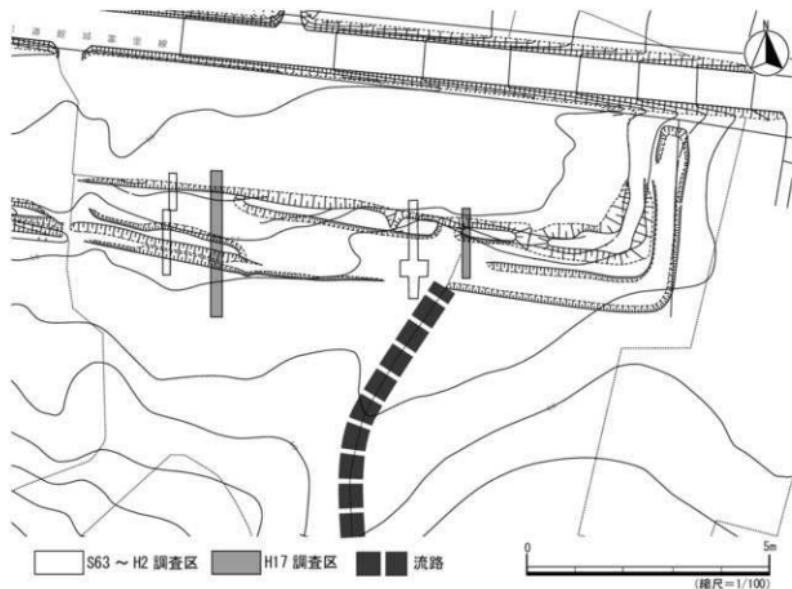


図 30 館城跡南東部の堀・土塁・流路

# 参考文献

## <引用文献>

### II章

- 厚沢部町町史編纂委員会 1969『桜島一厚沢部町の歩み一』  
 江差町史編集室 1979『江差町史』第三巻史料三 江差町  
 江差町史編集室 1981『江差町史』第四巻史料四(閑川家文書) 江差町  
 江差町史編集室 1983『江差町史』第六巻通説二 江差町  
 菊池明 1998『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社  
 工業技術院地質調査所 1975『地域地質研究報告 館地城の地質』  
 永田富智 1991「北門史綱(前承一巻之四より巻之七)」『松前藩と松前一松前町史研究紀要一』松前町史編集室  
 北海道開発庁 1970『5万分の1地質図幅説明書 江差』

### III章

- 厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所 1989『館城跡 遺構確認調査報告書』  
 厚沢部町教育委員会 2007『館城跡III 平成17・18年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』

### V章

\*章末に記載

### VI章

- 厚沢部町町史編纂委員会 1969『桜島一厚沢部町の歩み一』  
 加藤孝幸 2007「1 火山灰同定」『館城跡III 平成17・18年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』  
 鈴木茂 2008「1. 館城跡の花粉化石」『館城跡IV 平成19年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』

## <その他の参考文献>

- 厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所 1989『館城跡 遺構確認調査報告書』  
 厚沢部町教育委員会 1991『館城跡 遺構・範囲確認調査一第2・3次調査報告書一』  
 厚沢部町教育委員会 1991『館城跡 遺構・範囲確認調査一第2,3次発掘調査報告書一』  
 厚沢部町教育委員会 2007『館城跡III 平成17・18年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』  
 厚沢部町教育委員会 2008『館城跡IV 平成19年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』  
 厚沢部町教育委員会 2009『館城跡V 平成20年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』  
 厚沢部町教育委員会 2010『館城跡VI 平成21年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』  
 厚沢部町教育委員会 2011『館城跡VII 平成22年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』  
 大橋康二 1994『古伊万里の文様』理工学社  
 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年一九州近世陶磁学会10周年記念誌一』  
 九州近世陶磁学会 2009『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通(関東・東北・北海道編)』  
 第19回九州近世当時学会資料  
 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 2002『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録 江戸

時代の瀬戸窯』

財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター 2004『財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録 江戸時代の瀬戸・美濃窯』

函館市教育委員会 2006『特別史跡五稜郭跡箱館奉行所跡発掘調査報告書』

波佐見町教育委員会 1993『波佐見町内古窯跡群調査報告書』波佐見町文化財調査報告書第4集

波佐見町教育委員会 2006『大新登窯跡』波佐見町文化財調査報告書第17集

財団法人北海道埋蔵文化財センター 1984『史跡松前藩戸切地陣屋跡－昭和58年度発掘調査概要報告－』上磯町教育委員会

北海道文化財保護協会 1985『史跡松前藩戸切地陣屋跡－昭和59年度発掘調査概要報告－』上磯町教育委員会

北海道文化財保護協会 1986『史跡松前藩戸切地陣屋跡－昭和60年度発掘調査概要報告－』上磯町教育委員会

松前町教育委員会 2005『東山遺跡』

# 写 真 図 版





写真1 1-1調査区全景（北から）



写真2 I-1調査区沢状地形検出状況（東から）



写真3 I-1調査区沢状地形断面（南東から）



写真4 1-1調査区西壁断面（南東から）



写真5 1-2調査区全景（北から）



写真6 1-3調査区全景（東から）



写真7 1-3調査区中央トレンチ断面（北東から）



写真8 1-3調査区西壁 トレンチ（北東から）



写真9 2-1調査区堀検出状況（東から）



写真10 2-1調査区全景（南から）



写真11 2-1調査区B-B' 断面（東から）



写真12 2-1調査区C-C' 断面（西から）



写真13 2-1調査区C-C' 堀断面（西から）



写真14 2-1調査区C-C' 横列断面（西から）

写真15 2-1調査区横列検出状況（西から）



写真16 2-1調査区E-E'断面（東から）



写真17 2-1調査区F-F'断面（北から）



写真18 2-1調査区G-G' (西から)



写真19 2-1調査区H-H' 断面 (東から)

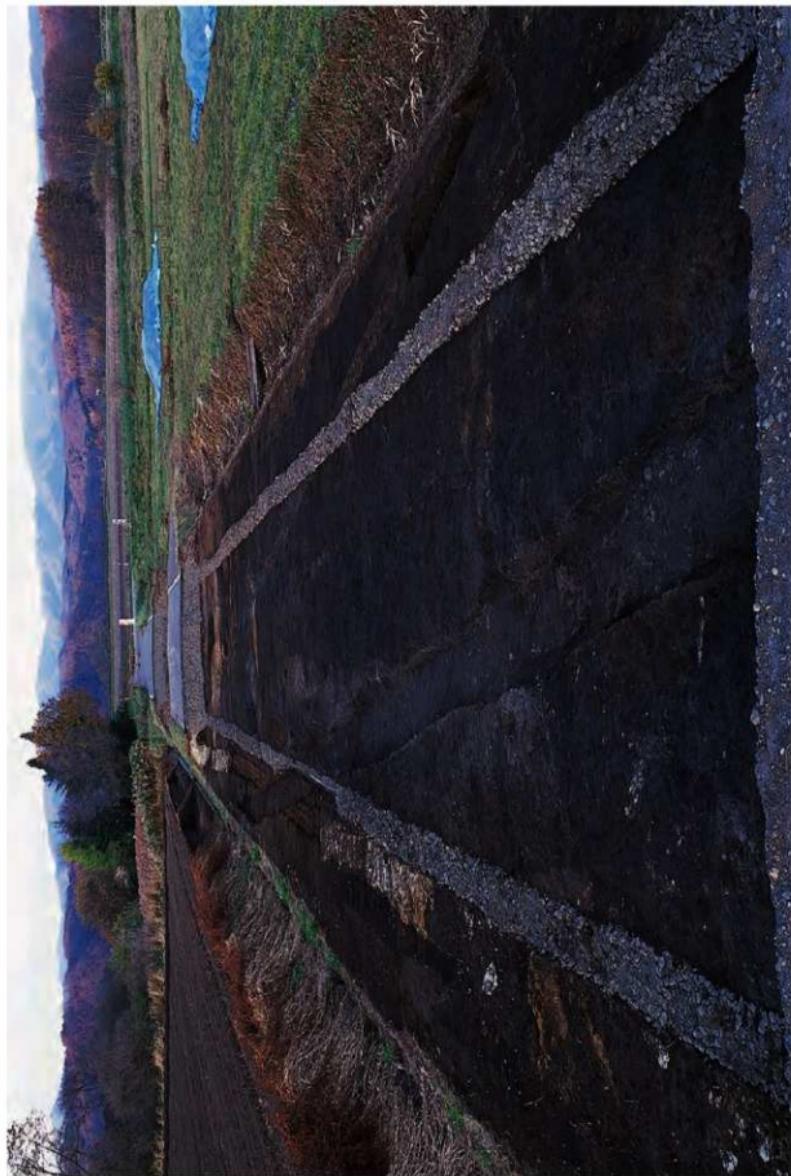


写真20 2-2調査区全景（南から）

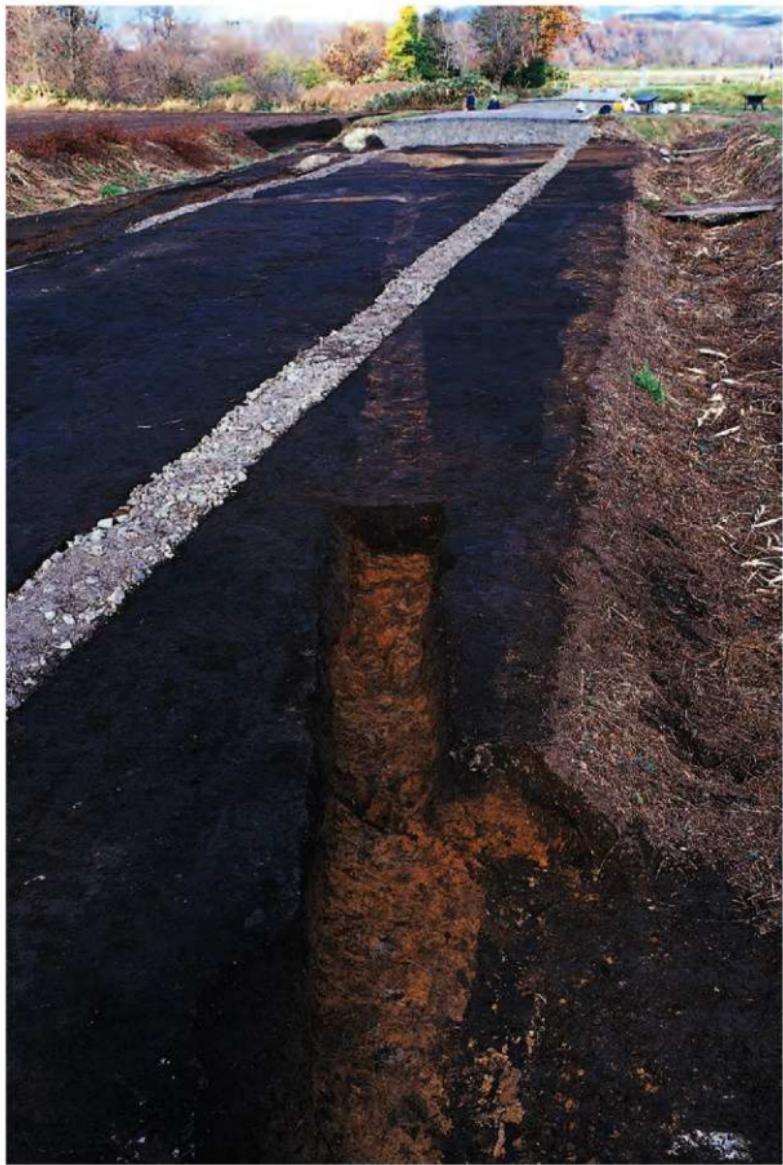


写真21 2-2調査区柵列検出状況（南から）



写真22 2-3調査区堀検出状況（南から）

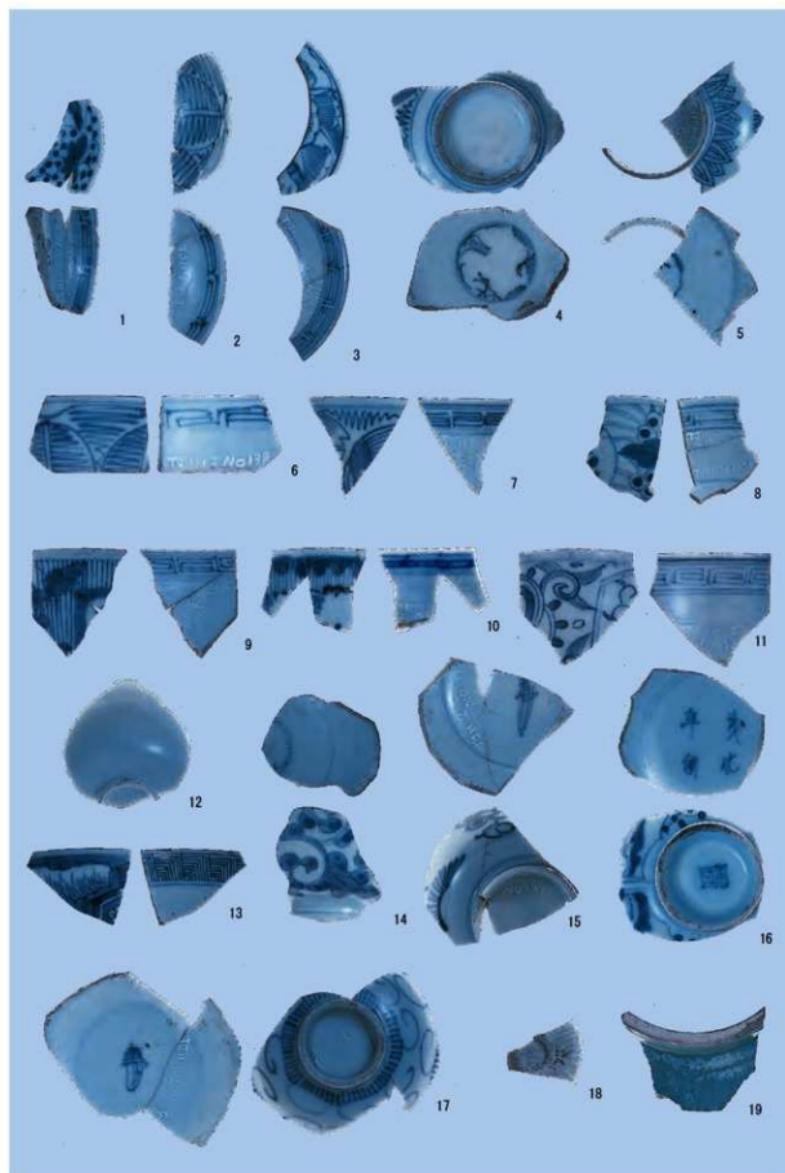


写真23 調査区出土遺物（1）



写真24 調査区出土遺物 (2)



写真25 堀出土遺物 (1)

写真26 堀出土遺物 (2)

## 報告書抄録

ふりがな	しせきまつまえししろあと ふくやまじょうあと たてじょうあと たてじょうあと							
書名	史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡 館城跡Ⅱ							
副書名	平成23年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	厚沢部町教育委員会発掘調査報告書							
シリーズ番号	第10集							
編著者名	石井淳平							
編集機関	厚沢部町教育委員会							
所在地	〒042-1113 北海道檜山郡厚沢部町新町234-1							
発行年月日	2012年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
たてじょうあと 館城跡	北海道檜山郡厚沢部町字城丘158ほか	1363	C-03-14	41°52'46"	140°20'36"	20110818～ 20111130	1,348m <sup>2</sup>	埋蔵文化財緊急調査事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
館城跡	城跡	幕末	堀、柵列、沢状地形	陶磁器、金属製品	西側の堀・柵列が検出された。			

厚沢部町教育委員会発掘調査報告書第10集  
史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡 館城跡図  
平成23年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書

平成24（2012）年3月31日  
編集・発行 厚沢部町教育委員会  
〒043-1113 北海道檜山郡厚沢部町新町234番地の1  
TEL (0139) 64-3311  
FAX (0139) 64-3822  
印 刷 株式会社長門出版社 印刷部  
〒040-0022 兩館市日乃出町11番13号  
TEL (0138) 52-2461  
FAX (0138) 53-2340